

近代日本の日記帳 ——故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクションより——

田中祐介・土屋宗一・阿曾歩

はじめに

本稿は、故福田秀一氏（1932–2006、国文学研究資料館名誉教授、国際基督教大学元教授）が長年にわたり蒐集された5,000点を超える近代日本の日記関連の資料（以下、「福田日記資料コレクション」）から、明治以降に出版ないし制作された492冊の書き込み式の日記帳を目録化して紹介するものである¹⁾。

日本中世文学研究の泰斗である福田氏²⁾は、幅広いご関心と視野から日本文学の研究を多角的に深められた。明治以降の歌謡、文学作品の映画化、諸外国における日本文学の受容、夏目漱石や森鷗外など「文人学者」たちの西洋留学経験を取り上げた論考は、その成果のごく一例である³⁾。

福田氏の多岐にわたるご研究を支えたのは、生涯をかけて蒐集された膨大なご蔵書であった⁴⁾。ご専門である中世を中心とした日本古典文学の資料に加え、近代文学とその研究書、自伝・評伝、旧制高等学校の歴史と文化（特に寮歌）、昭和史、明治から昭和戦後までの歌謡に関する貴重な資料も多い中で、最大規模のコレクションが近代以降の日記関連の資料であり、そこに含まれる多種多様な書き込み式の日記帳である。

近代の日記とは、「商品化された日記帳の時代の日記」⁵⁾に他ならない。近代日本において日記帳文化は独特に発達し、男性用、女性用に作られた日記帳のみならず、ライフステージ別、職業別、目的別に様々な日記帳が考案され、広く流通した。この意味において本稿が紹介するのは、日記に刻印された過去の人々の生の証であるとともに、多彩な姿で近代に花咲いた日記帳の出版文化とその歴史であるとも言える。

ドナルド・キーンが述べるように、日記は日本文学において小説や随筆に劣らず重要な位置を占めてきた⁶⁾。また、福田氏自身も、日記・日誌・紀行・手記・回想・自伝の類を書き遺す行為自体は日本に特有な現象ではないが、それらに関わる日本人の習慣や好尚はかなり特徴的であることを認めている⁷⁾。本稿が紹介する様々な日記帳の存在は、日本人と日記の親和的な関係について今一度考察するための縁ともなるであろう。

以下では「福田日記資料コレクション」の概要と国際基督教大学への寄贈経緯を略述したうえで、本稿が取り上げる日記帳コレクションの内容と特徴を概観する。

1. 「福田日記資料コレクション」の概要と寄贈経緯

福田秀一氏は、ご専門と深く関わる中世の日記文学とその注釈書や研究書にとどまらず、近代以降（便宜的に 1868 年以降とする）、福田氏が他界した 2006 年 4 月までに綴られた有名無名の日本人の日記を蒐集された⁸⁾。

5,000 点を超える近代日本の日記関連資料からなる「福田日記資料コレクション」は、下記の通りに分類できる。

- a) 商業出版された活字の日記本文
- b) 私家版として作成され、保存または頒布された活字の日記本文
- c) 活字の日記本文を掲載した学術誌、一般誌
- d) 日記に関する研究書や雑誌特集号などの二次的文献
- e) a から d の複写版
- f) 書き込み式の日記帳

上のうち、a から e は活字化された日記本文およびそれに関する二次的文献である。それに対して、本稿が目録化して紹介するのは、f の書き込み式の日記帳、すなわち手書きで日記が綴られた計 492 冊の日記帳である。a から f までの資料は全て、以下に述べるように国際基督教大学図書館および同学アジア文化研究所で分蔵する。

2006 年 4 月の福田氏の急逝後、ご自宅に遺された膨大なご蔵書の整理作業の一環として、夫人である恵美子氏とご相談のうえ、日記関連資料をすべて目録化することになった。2008 年 11 月より、月 1 ないし 2 回の頻度で、筆者（田中）が数名の国際基督教大学大学院生とともに福田邸での作業を進め、2010 年 2 月に目録化が完了した。寄贈先を選定するにあたり、国際基督教大学アジア文化研究所の所長であった小島康敬教授のご提案により、5,000 点以上の日記関連資料を同学の図書館およびアジア文化研究所で分蔵する方針が定まった。寄贈に際しては、同学教養学部のウィリアム・スティール教授よりご助言とご支援を頂いた。

大学図書館には、商業出版された活字の日記本文 (a) と二次的文献 (d) のうち、同館が未所蔵の資料を計 3,190 冊寄贈した。残る資料、すなわち図書館が既に所蔵する市販本 (a の一部、d の一部)、私家版の日記 (b)、雑誌 (c 全体、および d の一部)、複写版 (d)、そして手書きの日記帳 (e) はアジア文化研究所が保管することになった。目下 (2013 年 1 月) のところ、図書館に寄贈した日記帳はオンライン蔵書目録 (OPAC) への登録作業を進めており、“FUKUDA COLLECTION (NIKKI)”⁹⁾として、既に約 300 冊の閲覧と貸し出しが可能となっている¹⁰⁾。研究所が引き取った日記関連資料は、すべて研究所の資料倉庫に保管し、今後は順次の有効活用を図ってゆく。書き込み式の日記帳の目録公開はその第一歩である。

日記帳の目録を公開するにあたって追加調査をおこない、日記帳の記入者の性別と社会的

属性、記入期間、特記すべき日記の内容や日記帳の体裁上の特徴など、読者の利益に資する情報を新たに来るだけ盛り込んだ。本稿の公開に先立ち、調査の中間報告として、2012年11月に公開講演をおこなった¹⁴⁾。目録公開に至る経緯として、ここで述べておく。

2. 日記帳目録の特徴

本稿が紹介する計492冊の日記帳は、福田氏が主として古書店から購入、蒐集したものである。492冊のうち、313冊に日記欄への書き込みがある。未使用の日記帳は1960年以降に集中しているため、1959年以前に限れば、全体のおよそ7割に書き込みがある計算になる。

目録中の最古の日記帳は、一袋に纏められた資料群 [1-1 から 1-10]¹²⁾ に含まれる、1887年の日記が綴られた自家製の『明治十 日記帳』[1-2] であり、市販の日記帳で最も古いものは1895年用の『明治廿八年用 吾家の歴史』(警醒社書店)[6]である (図1)¹³⁾。一方、最も新しい市販の日記帳は、2005年用の『書き込み式「いいこと日記」』(マガジンハウス)[393]、『農家日記』(農山漁村文化協会)[394]、『Le Vésuve Diary 2005』(社団法人 ELEPHAS)[395]である。日記欄に書き込みがある日記帳で最も新しいものは、1970年用の『三年連用當用日記』(博文館新社)[367]である。なお本目録の末尾には、出版年月日が不明の日記帳を6冊含めた [396 から 401]。

目録中、最大の収録数を誇るのは博文館から出版された日記帳である。博文館は1895年に初めて『懐中日記』を、翌96年に『當用日記』を発行して以後、戦前戦後を通じて日記帳出版の最大手である¹⁴⁾。最も普及した『當用日記』のほかにも多種多様な日記帳を発行し、判型や装幀の選択肢も多い。全492冊の目録中に博文館(博文館新社含む)発行の日記帳は96冊あり、そのうち72冊に書き込みがある。書き込みの有無を別にして『當用日記』は59冊あり¹⁵⁾、同一の人物によって1929年から1941年までの12年間にわたり愛用された例もある [92-1 から 92-13]。『當用日記』以外の博文館日記として、本目録には『家庭日記』『懐中日記』『重寶日記』『婦女日記』『學生日記』『小學生日記』『英文當用日記』等を含む。

以下では、目録に収める日記帳を主題別に概観する。

読書と内面の記録

近代の日記帳は、日々の出来事を記録する媒体であるとともに、時には自己の煩悶や理想を吐露する秘密の場ともなった¹⁶⁾。様々な社会的立場の人々が自己の内面を日記に綴ったが、とりわけ青年期の日記にはその傾向が顕著である。

文芸愛好家や作家志望の青年に愛用された「文藝日記」の類には、文学や思想の読書の記録とともに、自己と他者をめぐる煩悶や、善悪の葛藤、将来に対する理想や憂慮が記されることが少なくない。本コレクションには、「文藝日記」として『新文藝日記』(新潮社)[75, 109, 129, 289]、『文藝自由日記』(文藝春秋社)[79, 97, 110, 178]、『文藝行動日記』(サイレ

ン社) [193] がある。このうち一例を挙げれば、1929年用の『文藝自由日記』[97]には高等商業学校生の寄宿寮生活が記され、友人や家族との関係に悩みつつ読書をし、学内の「思想善導懇親会」に参加した経験などが綴られる。

文学と思想を中心とした読書の記録や感想は、『大正元年日誌』(自家製) [35] 『大正九年 文章日記』(新潮社) [57]、『大正十一年 新文章日記』(新潮社) [63]、『自由日記 我が生活より』(第一書房) [124-1]、『昭和八年 當用日記』(博文館) [124-2]にも多くみられる。このほか、読書の不足を自己反省する『昭和十年 一日一想 心の日記』(教育資料株式会社) [178] や、敗戦後、自身の軍隊生活と捕虜生活を総括しながら文学と社会科学の読書に勤しむ『自由日記 1950』(新協出版社) [310] 等もある。

戦前における最難関校の受験記も内面の記録として興味深い。『昭和拾壹年度 生徒日記』[197-1] 『昭和拾貳年度 生徒日記』[197-2] 『全国日記』[197-3] は、旧制高等学校の最難関である第一高等学校の受験記録である。記入者は中学校在籍時に二度受験に失敗し、浪人生活へと入る。途中で挫けそうになりつつも、友人や父親の慰めの手紙を日記に書き写して自らを励まし、三度目に挑んだ受験で見事合格を勝ち取った。1939年4月6日の日記には、合格の感激が率直に記されている。

今日ぞ歓喜の日！！暗い灰色の生活の凡てを棄てて合格の喜びに浸るの日。我今天下の一高生為り。柏葉の下集ひ来る秀才に勝つて味ふ合格の感激！！唯涙に曇る白線の帽子。

同性の友人や異性との関係について筆を費やす日記もある。1928年用の『令女日記』(寶文館) [87] は友人との交際に関する悩みを記し、時に人生の意味を問う。このほか、「先生」への思いを記した女学校生の『令女日記』(寶文館) [210-1, 210-2] や、青年の複数の女性への恋心を綴った1957年用の『横線當用日記』(博文館新社) [318-2] もある。1931年に綴られた『自由日記 我が生活より』(第一書房) [125] では、日記帳冒頭の白紙頁に「女の子は可愛いとは私の偽はらざる告白だ 『告白だ』 『偽はらざる』 こんな言葉を何故使ふのだらう私は」と記される。日記帳の持主の不運の死後、形見として譲り受けた親族によって引き続き綴られた1931年用の『重寶日記』(博文館) [120] も興味深い。日記帳の見返しに書かれた「人生はお前の考へる様に ONNA を目的とするのではない。さうかな？」との文言の「さうかな？」が赤字の二重線で消され、「人生は努力せんが為の人生なり。努力して始めて人生を味ひ得たと言ひ得る」と脇に訂正書きがなされている。そもそもの使用者が表明した人生における異性愛と性欲の重視に、二代目の使用者が反駁したものであろう。

女性用の日記帳

近代日本の日記帳には、女性用として出版されたものも多い。本コレクションにも『少女日記』（婦人之友社）[66]、『少女ダイアリー』（寶文館）[94]、『女學生日記』（國民出版社）[136]、『令女日記』（寶文館）[87, 93, 149, 179, 189, 210-1, 210-2, 228, 249]、『婦女日記』（博文館）[127, 219]、『主婦日記』（婦人之友社）[200, 269]、『女性日記』（改善社）[216]を含む。これに加えて高等女学生の夏期休暇日誌 [54, 88, 91] があり、『家庭日記』（博文館ほか）[118-1 から 118-6, 175, 263, 332] も、男性が使用した例もあるが、女性向けに編集された日記帳である。

女性用の日記帳は、汎用日記では十分に満たせない女性の日記愛用者の要求に応える製品であると同時に、家庭において女性が従うべき規範と果たすべき責任を明らかにし、日々論ずための媒体でもあった。女性用の、特に主婦層向けに作られた日記帳の欄外の読み物や付録では、料理法、社交法、夫との接し方、子育ての助言のほか、家計簿を用いた節約と計画経済の意義が説かれ、良妻賢母を実践するための指南書的性格を帯びている。これらは近代の日記帳の「国民教育装置」¹⁷⁾としての側面を如実に示すものと言えるであろう。

戦前の少女文化が垣間見られる日記帳がある。1929年、大阪在住の小学5年生の少女の日記である『少女ダイアリー』[94]には、愛読誌である『少女倶楽部』（講談社）の最新号を待ち焦がれる様子が次のように記される。

早く少女倶楽部がくればよいと思ひながら中々こないのでもつまらなかつた（略）ほんとに面白い。私は早くからまつている（3月9日）
まつてまつてまちあぐんだ少女倶楽部がとうとうきた。さあよみだしたらままらない。だれが何といつてもへんじもしないので笑はれた（3月10日）
ああつまらない、せつかくきた少俱もすつかりよんでしまつた（3月11日）

少女文化を醸成する媒体であった少女雑誌の到着を心待ちにし、いざ手にすると一心不乱に読み耽り、あっという間に読み終えてしまう様子がよく表れている。

少女雑誌に対する愛着は、戦争の時代を迎えても決して消えないものであった。随筆家・イタリア文学研究者の須賀敦子は、戦時中の少女雑誌について「着るものはなくなる、食べるものも満足にない日常で、現実がどちらを向いても灰色の壁にぶつかっているような時代に、この雑誌はそれを超越して私たちをある愉樂の世界にさそってくれ」たと回想する¹⁸⁾。本コレクションには、日米開戦の1941年に空襲の話題を嫌って読書の感想を綴る高等女学校生の『鍛錬日誌』（東京私立高等女学校協會）[258]がある。

少女の文通文化が窺える日記もある。1959年用の『平凡スタア日記』（平凡出版）[335]は、国内外に多くの文通相手をもつ中学3年生の日記であり、文通相手のことを「お兄さま」「お姉さま」と慕ったり、海外からの英語の手紙を訳して返事を書いたり、当時の文

通文化の有様をよく示している。

主婦を中心に、成人女性による日記も少なくない。掃除や洗濯など、その日に済ませた家事の記録が丹念に記された1929年用の『家庭重宝日記』（婦女界社）[96]、「さしみ」「まめ、魚」など毎日の食事（あるいは食材）が1930年から1935年までの6年間にわたって毎日ほぼ欠かさず記された『家庭日記』（博文館）[118-1 から 118-6]、会社勤めの日々が綴られた1939年用の『令女日記』（寶文館）[228]、戦時下の家庭料理の献立が三食とも記された1942年用の『主婦日記』（婦人之友社）[269] 等がある。

趣味用の日記帳

本コレクションには、趣味用途の日記帳も数多く含まれる。名句・名歌が満載された『俳句日記』や『短歌日記』の類[41, 46, 47, 86, 106, 142, 159, 183, 186, 381, 382, 383, 385, 388]は、目録中では早くも大正初期に登場している（1914年用の『短歌日記』[41]、1915年用の『俳句日記』[46]。どちらも東雲堂書店刊）。

1930年代を迎えると、趣味用の日記帳は急増する。当時は、民衆の生活水準・教育水準の上昇と、それに伴う大量消費と大衆文化の出現により、新しい娯楽や余暇の過ごし方が盛んに論じられた時代であった¹⁹⁾。本コレクションの趣味日記には、早いもので1926年用の『演芸趣味日記』（春陽堂）[72] がある。1930年代の趣味日記として、1930年に創刊された『山日記』（梓書房、のち茗溪堂）は、1988年まで計53巻が発行されたロングセラーである。本コレクションにも創刊当時の1930年用を含め、1988年まで計27冊の『山日記』がある[108, 116, 134, 155, 160, 331, 337, 338, 340, 342, 344, 346, 350, 353, 355, 358, 363, 366, 369, 370, 371, 374, 375, 376, 377, 380, 384]²⁰⁾。また、各々の正確な創刊時期は未詳であるが、1930年代に現れる日記帳として、1930年用の『趣味の日記』（改善社）[102]、1934年用から計6冊を含む『釣日記』（朝日新聞社）[167, 184, 203, 224, 253, 265]、1936年用から計5冊を含む『カメラ日記』（第一書房）[195, 201, 222, 237, 330]のほか、『歌劇日記』（寶塚[少女]歌劇團）も1936年用から計5冊を含む[187, 209, 244, 250, 264]。

趣味用の日記帳に多く共通するのは、付録の充実である。出版年によって多少の内容の増減と相違はあるが、『山日記』には登山に関する小辞典や全国の登山情報、各地の登山行程表の類が日記帳全体の半分程度を割いて記される。『カメラ日記』にはカメラおよびレンズの構造、機能、使い方、シャッターやアクセサリーに関する話題等が詳細に紹介される。『釣日記』では年間を通しての全国の沿岸潮時表や各地釣場の詳細情報に日記帳の大部分が占められ、日記欄は全体の1割に及ばないこともある。これらはいわば、日記欄を付録に備えた各分野の充実したハンドブックの様相を呈している。

日記帳と戦争

本コレクションは、近代日本の戦争経験を留める軍隊生活や銃後生活の日記帳も多く収録

する。

小学校教員が課された六週間現役兵²¹⁾の経験を記した日記帳がある。日記帳の書き手は、1913年の『教育実習日記』[39-1]では高等小学校での約2ヶ月間の教育実習生活を記した。細かな実習内容や教員からの助言とともに、「自分が教壇ニ立ツト子供等ハニコニコ顔ニテ余ヲムカヘヌ」(9月5日)と教授の喜びも綴られる。この日記帳に続く1914年の『日誌』[39-2]において、同じ書き手の六週間現役兵としての生活が記される。

軍隊生活は汎用日記に綴られる以上に、『軍人日記』『軍隊日誌』『軍隊日記』『戦陣日記』『战友日記』『つはもの日記』『皇軍日誌』等、専用の日記帳に多く記された。本コレクションは、1909年から1945年までの軍人用日記を収める[29, 49, 150, 181, 248, 259, 260, 261, 266-2, 266-3, 270, 282, 285, 286]。所属部隊や従軍地域の検証が今後の課題として残る日記もあるが、日本の軍隊生活を知る貴重な史料であると言えよう。多くは従軍期間の記録であるが、同一の書き手による『自由日記』(三省堂)[266-1]および『軍隊日記』[266-2, 266-3]は、高等工業学校在籍時の徴兵検査から、軍隊入営、戦況の悪化、敗戦、戦後の生活に至る1942年から1954年までの記録が留められ、当時の青年の戦争経験の総体を窺い知る一例となっている。

多くの日本の軍人が戦地において詳細な日記を綴ったことに対する驚きを、ドナルド・キーンは次のように書き記している。

アメリカの軍人は、日記を付けることは固く禁じられていた。敵の手に渡ることをおそれてのことである。しかしこれは、アメリカ人には何等の苦痛も与えなかった。どちらにしても、日記を付ける人間など滅多にいなかったからである。ところが(略)日本の軍人には、新年になるとわざわざ日記帳が支給されて、この頃の学童が、夏休中日記をつけさせられるのにも似て、必ず日記をつけるようにと命じられたのである。おそらく日本の士官たちは、その中に真の軍人精神が表れているかどうかを調べるために、定期的に兵隊の日記を読んだのであろう。²²⁾

太平洋戦争中、情報将校として戦場に遺棄された日記の翻訳作業に従事していたキーンは、兵士が書き遺した日記の内容と数量の膨大さに接し、日本人の日記への強い執着に初めて気づいたという。

キーンの言葉を裏付けるように、学徒出陣兵が記した『軍隊日記』[285]には、日記を綴る態度の不徹底を上官が叱責した例を見出せる。日記帳の持ち主が迂闊にも日記を書き忘れた1944年2月14日、日記を点検する上官は「日誌ヲ忘レル様ナ事デハ駄目ダ」と厳しく嗜めた(図2)。日本の軍人にとって、日記をつけ忘れることは取りも直さず、戦いを勝ち抜く覚悟の弛緩を意味したのである。

戦意の不足に対する点検者の叱責は、銃後の少女の日記にも見られる。1944年、国民学

校3年生の少女が日記帳代わりにした『Note Book』[288]には、教員の点検印と感想が朱色で追記されている。大方は誤った漢字の指摘や勉強の助言であり、時には「体に気をつけなさい」といった温かい言葉もかけられる。しかし、3月3日から7日にかけての日記欄には全体に大きく朱で×印がつけられ、「何をしてゐるか、こんな日記ではだめだ!」との怒りのこもった教員の言葉が記される(図3)。この翌日、少女は「鐵拳」を下されたようなショックを受け、自分が日記を義務感から書いていたことを反省するのであった。以後、少女は「硫黄島の血戦」を思つて「真に頑張ろう」と決心し、日記にもにわかに戦争や兵隊の話が増えてゆく。

以上のほかにも、銃後の生活は様々な日記帳に現れる。日米開戦の1941年12月8日、「こんな事が起らうとは、夢にも思はなかつた」と驚きを記す中学生の『學生日記』(博文館)[257]、刻々と進展する戦況を記録した1942年用の『小國民日記』(田中宋榮堂)[268]、「モンペー」と「シミズ」を縫う1943年の夏期休暇の生活を綴った『鍛錬日誌』(東京市立高等女學校協會)[283]、報道を通じて知った沖繩戦の悲劇を書き留めた『新文藝日記』(新潮社)[289]等、各々の日記使用者の戦争体験が刻まれている。

敗戦の色が濃い用紙難の時期の日記をめぐって、古書店主であり文筆家の青木正美は「日記帳の発行は困難となり、ほとんどの日記作者は一時日記書きをやめるか、ザラ紙のノートを使用して続けるしかなくなってしまう」²³⁾と記した。事実、この時期には博文館の『當用日記』も発行部数が大幅に減少する²⁴⁾。その中で、本コレクションには未使用ながら表紙上部に「決戦體制版」と掲げられた1944年用の博文館『當用日記』[287]がある。日記の代用例としては、先述した女子小学生の『Note Book』[288]のほかにも、前段に挙げた『新文藝日記』は1931年用の日記帳を1945年用に転用したものである[289]。

3. 日記帳コレクションの今後の利用

以上、福田氏の日記帳コレクションの特徴を各主題に分けて概観した。これまで、古今東西の有名無名の書き手による日記が活字化されて後世の読者を得た。その一方で、本稿が取り上げた日記帳のように、多くの手書きの日記が未整理のまま遺されている。本コレクションは、いわば近代日本を生きた様々な社会的立場の人々の生活と思想が刻印された歴史の証言である。今後はコレクションに収録された個々の日記帳について、掘り下げた検証と考察がなされるべきであろう。

日記を記す行為は、歴史家のミシェル・ペローの言葉を借りれば、書き手の生きる意志を紙面に刻印することであり、しかもその意志は書き手の死後も生き続ける²⁵⁾。そして日記帳に刻まれた書き手の意志、あるいは物語を、生き生きと再生させるのは後世の読者に他ならない。なぜならそれができるのは、日記の書き手ではなく、「偶然あるいは意図をもって日記帳をひらく他人」だからである²⁶⁾。今後、本コレクションの日記帳が学術的に活用されることを願ってやまない。

既に国際基督教大学でも、大学院生を中心に個々の日記帳の読解に取り組む研究会が発足した。その成果が遠くない将来に公になることを望む。また、学外からの閲覧希望にも対応できる態勢も整えており、積極的な活用を期待したい²⁷⁾。

4. 謝辞

この解題を結ぶにあたり、「福田日記資料コレクション」の国際基督教大学への寄贈をご快諾下さった福田恵美子先生に改めて心からの御礼を申し上げたい。個人的な感慨となり恐縮だが、福田秀一先生の遺稿集出版とご蔵書整理に携われたことは、大学院での学びの途中で恩師を失った私（田中）にとっては、先生の愛された書物に触れ、先生の記憶を生き生きと取り戻す掛け替えのない機会となった。恵美子先生は目録化の作業日には毎回昼食に手料理を振る舞って下さり、大学院の後輩と共に美味しく頂きながら、作業の進捗をご報告した。食後の休憩時には、福田秀一先生の在りし日の思い出をお話下さった。

本稿の制作にあたり、共同作者である土屋宗一さんと阿曾歩さんには大変お世話になった。目録の充実化のために増えた作業量を厭わず、快く協力してくれたことに感謝を表したい。また、日記帳目録の作成に先立つ蔵書整理と、活字化された日記資料の目録化を手伝ってくれた多くの大学院の後輩たちにも、この場を借りて御礼を述べたい。彼等の力無しには、本稿の完成もあり得なかった。

最後に、福田秀一先生に今一度感謝を申し上げたい。ご生前の教えのみならず、遺して下さったご著作とご蔵書を通じて、私も後輩たちも今日なお多くの学びを得ている。本目録の公開が先生の資料蒐集のご意志に叶い、今日に活かすことになれば、ひとりの教え子としてこの上ない喜びである。

5. 凡例

計 492 冊の日記帳の目録を掲げるにあたり、以下に凡例を示す。

目録の見出し中、「日記帳名」「著者・编者」「版元」欄の漢字の字体は原表記を尊重した（例：「當用」「學校」等）が、今日通行の字体に改めたものもある（例：博文館→博文館としない）。

数字は算用数字に統一した（例：第一学年→第 1 学年）が、慣用語、専門語等については原表記を尊重した（例：六週間現役兵→ママ）。

年月日はピリオドを用いて区別した（例：1942 年 1 月 1 日→1942.1.1）。

目録に掲載された日記帳の版刷は、特に明記がない限り初版初刷である。重版重刷の日記帳については、「備考・特記事項」欄に版刷数を記し、併せて初版の発行年月日を示した。その際、初版の発行日が奥付等に記載されず判明しない場合は、「初版無記」と記した。

以下では、目録の見出しに示した「番号」「日記帳名」「著者・编者」「版元」「発行年月日」「記入者情報」「記入期間」「備考・特記事項」の項目別に凡例を示す。

【番号】

日記帳ごとに振った管理番号を示す。日記欄への記入が古いものから新しいものの順に時系列に並べた。未使用の日記帳は各年ごとに纏め、発行年月日順に並べた。同一の記入者による複数の日記帳、および同一の袋に纏められた複数の同類の資料は纏めて示し、ハイフンによる子番号を付した（例：1-1, 1-2）。

【日記帳名】

当該日記帳の奥付の記載に従い、日記帳名を記した。奥付の情報が不十分な場合は表紙・背表紙の表記に倣った。

【著者・編者】

当該日記帳の奥付に記載された著者名・編者名を記した。

【版元】

当該日記帳の奥付に記載された版元に関する情報を記した。

【発行年月日】

当該日記帳の奥付に記載された発行年月日を記した。原表記が元号のものは全て西暦に換算して示した。

【記入者情報】

記入者氏名が判明する日記帳について、「氏名」欄に○を示した。氏名あるいは日記欄の内容や文体から性別が判断できる場合、「性別」欄に男女の別を示した。「属性」欄には分かる限りの日記記入者の社会的属性を、職業（学校名、学年、身分等を含む）、生年月日（年齢）、居住地（便宜的に現在の地名を用いる場合もある）、家族構成（同居人）、その他の順に記した。

【記入期間】

当該日記帳の日記欄への書き込みがある期間を示す（例：1.1-12.31）。未記入日のごく稀にある場合も、未記入日は逐一記さず、通し期間で示した。その一方で、記入日のごく少ない場合や、未記入期間が長期にわたる場合は、記入日（期間）が分かるよう示した（例：1.1-16, 2.9-16, 5.3-13）。日記の年月日が明らかに旧暦と分かる場合は、その旨を記した（例：[旧] 1897.4.21-5.29）。

【備考・特記事項】

当該日記帳の内容の特徴、目立った出来事やそれに対する記入者の感想など、特筆すべき事項を記したほか、日記帳の体裁、欄外や付録の特徴にも極力触れた。

6. 目録

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
1-1	明治十年 酒売立帳		自家製和綴		○	男		1876.12-1877.12	酒の売買記録 (1-1 から 1-10 までは一纏まりに袋に収められた日記と帳簿)。
1-2	明治十日記帳				○	男		1877.2.17-5.17	麦、米、魚、人足賃金等の支払記録。
1-3	明治十卅 五月十日 天満宮家ニ付寄進帳					男か		1877.5.10	天満宮家への寄進の記録。
1-4	明治十八年 大福帳					男か		1884.12.26- 1885.2.1	商家の帳簿。
1-5	明治廿八年 人足其他野取簿					男か			各地に要した人足数を記す。
1-6	蚕日記控帳簿 吉田氏 明治三十年				○	男	福島県田村郡高瀬村。	[旧]1897.4.21-5.29	同一記入者による養蚕の記録。
1-7	養蚕日記簿 吉田氏 明治三十一年							[旧]1898.4.2-5.12	
1-8	養蚕日記帳 吉田氏 明治参拾貳年							[旧]1899.4.5-5.20	
1-9	養蚕日記帳 吉田氏 明治参拾参年							[旧]1900.4.24-6.9	
1-10	金銭出入控帳 吉田氏 明治参拾四年正月吉日							[旧]1901-(記載なし)	
2	授業日誌		自家製和綴				尋常小学校教師。	1888.5.15-6.4	「読方」「習字」「算術」など、尋常科第三年級の授業日記。ほか、「尋常温習科教案」と題したメモ書きあり。
3	日乗		自家製和綴			男	私立山口商業学校囀託教員。	1889.1.1-12.31	教員生活の記録。年間を通しての詳細な出納表あり。
4	見聞日録 明治二十六年一月		自家製和綴		○		不明。	1893.1.1-12.31	日々の新聞報道等から得た政治動向等の記録。
5	明治甲午孟秋 胡馬日記		自家製和綴		○	男	医者か。	1894.9.1-14	漢文(白文)で書かれた日記。金銭出納記録がほぼ全体を占める。
6	明治廿八年用 吾家の歴史	聴点居主人(編)	警醒社書店	1894.11.25		男	不明。	1895.1.1-2.17	四版(初版 1892.11.7)。日記欄は「往来」「為したる事」「得たる思想」「社会の出来事」からなる。日清戦争に関する感想あり。
7-1	日誌			1894.12.23	○	男	南桑田郡高等小学校第 1-2 年生。1885 年 9 月生まれ。土族。 同上校 2 年生。	1895.4.6-7.14	和綴。学校生活の記録。毎日の「課業」欄は「受業」「自修」「家事」からなる。「川へオヨゴニ行キタリ」(1895.7.22)、「父ト共ニ行軍将棋ヲシテ遊ベリ」(同、10.9) 等、放課後や休日の記録も多数。
7-2	日誌			1895.6.30				1895.7.15-10.21	
7-3	日誌			1895.10				1895.10.22-1896.1.28	
7-4	日誌			1895.12.25				1896.1.29-5.7	
7-5	日誌			1896.4.1				1896.5.8-8.15	
7-6	日誌			1896.4.1				1896.8.16-11.23	
8	観聴日録		自家製和綴		○	男			
9	懐中日記簿	服部喜太郎	求光閣	1896.11.5		男か	不明。	1897.1.1-14	三版(初版 1894.11.5)。
10	明治三十一年 醫家日記	福山米太郎(編)	英蘭堂	1897.12.20			未使用		四版(初版 1894.12.13)。
11	明治三十一年 懐中日記	博文館編輯局(編)	博文館	1897.10.7		男か	不明。	1898.1.2-8.21	金銭出納のみ記録する日が多い。
12	明治三十三年 懐中日記	東京圖書出版合資会社	東京図書出版合資会社	1899.10.9		男	岐阜市在住か。	1900.1.1-4.30	「本日他出セズ」の文言が散見され、自宅で過ごすことも多い。
13	明治三十四年 當用日記	博文館編輯局(編)	博文館	1900.10.25		男	学生。	1901.1.1-5.23, 9.2-3	授業内容を中心に学校生活が細かく記される。
14	重寶日記	石川謙(編)		1900.11.7		男	役場勤務。	1901.1.1-11.23	出勤記録と業務内容が簡潔に綴られる。
15	修養日誌		自家製和綴		○	女	3 年い組。寄宿生活。	1903.4.8-1904.1.12	学生生活、寄宿生活の記録。この年間催の第五回国内勸業博覧会への言及あり(4.15)。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
16-1	明治三十七年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1903.10.10	○	男	浄土真宗僧侶。三重県津市厚源寺。	1904.1.1-12.31	日記は「総記」欄に簡潔に記され、本文では金銭出納の記録のみを記すことが多い。
16-2	明治三十八年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1904.10.10				1905.1.1-12.31	
16-3	明治三十九年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1905.10.8				1906.1.1-12.31	
16-4	明治四十年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1906.10.17				1907.1.1-12.32	
16-5	明治四十一年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1907.10.18				1908.1.1-10.18	
16-6	明治四十二年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1908.10.18				1909.1.1-12.17	
16-7	明治四十三年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1909.10.25				1910.1.1-12.31	
16-8	明治四十四年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1910.11.10				1911.1.1-12.28	
16-9	明治四十五年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1911.10.10				1912.1.1-12.31	
16-10	大正二年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1912.11.3				1913.1.1-12.32	
16-11	大正三年 當用日記	行川静 (編)	博文館	1913.9.13				1914.1.1-12.31	
16-12	大正四年 當用日記	行川静 (編)	博文館	1914.9.10				1915.1.1-12.31	
16-13	大正五年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1915.10.8				1916.1.1-12.31	
16-14	大正七年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1917.9.5				1918.1.1-12.31	
16-15	大正八年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1918.9.5				1919.1.1-12.31	
17	入浴日記 (那須温泉雑誌)	山田治衛門	寶来社	1905.4.30	未使用			和綴。湯治用の日記。「普通入浴心得」等の読み物あり。	
18	征露紀念 明治卅八年 懷中日記	東京圖書出版	東雲堂書店	1904.10.10		男		1905.1.1-12.31	出勤記録と業務内容が簡潔に綴られる。
19	尋常高等生徒日記簿	大西成一	中村鍾美堂	1905.11.12	未使用				再版 (初版 1905.1.18)。
20	懷中日記 明治三十九年	大橋新太郎 (編)	博文館	1905.10.13	○	女	岐阜県海津郡在住。	未使用	持主の名前は記されるが中身は未使用。
21	明治三十九年 學生日記		金港堂書籍	1905.10.10			学生か。	1906.1.1-1.5, 2.1-2.3	ごく簡潔な生活の記録。
22	明治三十九年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1905.11.2		男	中学生。	1906.1.1-12.31	ほぼ毎日「起床後手水ヲツカヒ朝食ヲ終リテ登校ス」等、朝目覚めてからの行動が細かく記される。巻末の「金銭出納録」に詳細な記録あり。
23	銃獵日記	和智郁郎	横濱金丸銃砲店	(奥付無、扉に「明治四十年一月元旦」と記載)	未使用				月刊雑誌『銃獵界』臨時増刊。狩猟の記録用。
24	明治四十年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1906.10.17		男	不明。	1907.1.1-12.4	天候と外出に関する簡潔な記録。
25	明治四十一年 當用日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1907.10.18		男	不明。	1908.1.1-3.17	三版 (初版無記)。日々の出来事の簡潔な記録。
26	明治四十二年 懷中日記	富本長洲 (編)	積善館	1908.9.5		男	不明。	1909.1.1-11.8	日々の出来事の簡潔な記録。計算やメモ帳代わりにした日も多い。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
27	明治四十二年 重要日記	實業之日本社	實業之日本社	1908.11.1		男	左右田銀行勤務。	1909.1.1-12.26	巻末の見返しに母から贈られた日記である旨記される。朝が苦手らしく、朝食をかき込んで慌てて出勤したと記すことが頻繁にある。
28	明治四十二年 新案 常用日記	柳川春葉・齋藤松洲	春陽堂	1908.11.15		男	学生。	1909.1.1-9.5	巻末の「備忘録」には、4月23日に失った母への思いが綴られる。
29	軍人日記 兵第十六隊第參中隊第貳給養班	軍事普及会	軍事普及会	1908.11.28	○	男	兵第16隊第參中隊第2給養班。	1909.2.4-5.12	日記欄はその日に学んだ「学科」「術科」のほか、「上官ノ注意」「其日ノ勤務」「記事」を含む。軍事演習の記録が多数。
30	繪入 學生日記	林治三郎	中川玉成堂	1909.1.10		男	不明。	1909.12.1	再版(初版無記)。
31	明治四十三年 常用日記	大橋新太郎(編)	博文館	1909.11.28	○	女か	東北地方在住か。	1910.1.1-10.23	三版(初版1909.10.28)。老母の介護について記す。
32	休暇日誌 尋常小學校第三學年	教育研鑽會	學海指針社	1911.6.17			未使用		休暇中の学習課題付き。
33	化粧日記	野村久太郎(編)	伊東胡蝶園	1911.7.10			未使用		再版(初版1911.7.10)。日記欄外には歌舞伎役者の化粧談を掲載。
34	入浴日記(那須温泉雑誌)	山田治衛門	帝國賣社	1912.6.18			未使用		和綴。湯治用の日記。「普通入浴心得」等の読み物あり。
35	大正元年日誌		自家製和綴			男	妻子あり。	1912.5.1-12.31	新聞雑誌読書の記録多数(『日本及日本人』『陽明学』『萬朝報』『東洋哲学』『禪宗』など)。
36	国定教科書準拠 休暇日誌	普通教育研究会	文林堂書店	1912.7.5			高等小學校2年。	1912.8.1-8.31	夏休みの生活の記録。西山温泉に赴き、「ソノ湯ニハイツク時ニハナントナクイキモチガシマシタ」(8.1)。「朝五時ゴロ起マシタ、水カツギヲシ、ソシテ農業ノ本ヲ讀ンダリシマシタ」(8.18)。
37	旅行日記	文運堂編輯部(編)	文運堂	1912.12.5			未使用		「旅行の心得」「旅行携帯品案内」等を取録。
38	夏季復習日誌 尋常科第四學年	小宮義比(編)	神奈川縣教育會	1913.7.14			青木小學校4年生。神奈川県在住。	1913.8.1-8.31	修身、讀方、書方、算術など、夏休みの復習課題からなる日記。
39-1	教育實習日記		自家製和綴		○	男	第13学級教生。	1913.9.2-11.12	教育実習生の日誌。読み方、地理など。「自分ガ教壇ニ立ツト子供等ハニコニコ顔ニテ余ヲムカヘヌ」(9.5)。
39-2	日誌		自家製和綴				六週間現役兵。	1914.8.4-9.9	上記学生の六週間現役兵の経験が記される。
40	大正三年 家政日記	金港堂書籍(編)	金港堂書籍	1913.9.30			未使用		付録に「日本全國鐵道航路案内地圖」あり。
41	短歌日記	西村寅次郎(編)	東雲堂書店	1914.9.10			未使用		扉に「ひのもと文庫」の印あり。
42	大正四年 新式常用日記	積善館編輯所(編)	積善館本店	1914.9.5	○	女	小學校低学年か。	1915.1.1-12.25	ほとんどがひらがなで記された日記帳。未記入の日も多い。
43	大正四年度 養蠶日誌	周防初次郎(編)	明文堂	1915.4.10	○	男	飼育主任。	1915.7.11-7.15	四版(初版1913.6.5)。「飼育日誌」のほか、「桑葉採取日誌」「蠶種製造成績表」等に記入あり。
44	夏季休業日誌 尋常第四學年	大日本兒童教養會	尚文堂	1915.7.5	○	女	東京市駒本小學校第4学年。	1915.7.21-8.15	家族生活や勉強の記録など。休暇中の課題付き。
45	大正五年 懐中日記	積善館編輯所(編)	積善館本店	1915.9.5	○	男	船員。石川県石川郡蝶屋村。	1916.1.1-12.26	船員業務の記録。香港、大連等にたびたび寄港。
46	大正五年 俳句日記	西村寅次郎(編)	東雲堂書店	1915.9.20	○	男	不明。	1916.1.1-12.31	日記に添えて自作と思われる俳句が書き連ねられる。
47	大正五年 俳諧日記	初山仁三郎(編)	俳書堂	1915.11.7		男	不明。	1916.1.11-2.13	国内外の政治動向を題材にした自作の俳句が記される。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
48	夏休おさらび日記 尋常第一學年用	小學兒童教 養會	厚明社	1916.6.30	○	男	麻布尋常小学校 第1学年。	1916.7.21-8.31	一日分の日記は小さい日記欄のほか計算 や文章作成の課題からなる。日記欄には 毎日の遊びの内容を記録し、課題も真面 目にこなす。
49	軍隊日誌 大正五年 十二月一日自 大正六 年六月十七日 至		自家製和綴		○	男	軍人。「歩兵第9 聯隊第7中隊第 4班」(表紙)、「第 6中隊第6内務 班」(裏表紙)。	1916.12.1- 1917.6.17	軍隊生活の詳細な記録。
50	一代日記	磯村政富(編)	東京書院	1917.11.30	未使用				箱入りの日記帳。一緒に懐中手簿も収め られる。
51	大正七年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1917.9.5	○	男	学生。	1918.1.1-12.31	学校生活と交友の記録。
52	大正八年 うたひ日記	吉田唯雄	檜詠曲書店	1918.11.20	未使用				毎日、日記欄外に有名歌が掲載。
53	大正八年 家庭日記	大橋新太郎 (編)	博文館	1918.10.15		女	不明。	1919.1.1-12.31	四版(初版無記)。日々の出来事の簡潔な 記録。日記欄には金銭出納も記録される。
54	大正八年 夏期休暇日 誌 福井高等女學校		今李商店	記載なし	○	女	福井高等女學校 第4学年3組。	1919.7.28-8.31	女子学生の夏期休暇生活が詳細に記され る。母、妹、叔母の話題。友人との交遊。
55-1	大正九年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1919.9.5		男	農業従事。静岡 県在住。妻子あ り。	1920.1.1-12.31	家族で農業を営む。仕事と家庭生活の記 録。娘は人力車で女學校に通う。
55-2	大正十年 當用日記	博文館(編)	博文館	1920.10.4				1921.1.1-12.31	
55-3	大正十二年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1922.9.5				1922.1.1-12.31	
55-4	大正十六年 當用日記	博文館(編)	博文館	1926.10.4				1927.1.1-12.11	
56	大正九年 國民日記		民友社	1919.11.15	○	男	妻子あり。	1920.1.1-7.6	起床時からの出来事を毎日克明に記す。 毎日ほぼ必ず娘について記す。
57	大正九年 文章日記		新潮社	1919.11.20		男	高等学校生か。	1920.1.1-12.31	学校生活の記録。文学や思想の読書をよ くする。銀座でクラシックレコードを購 入することもしばしば。「ゆふべ急に床に 入ってから快くなつて創作的な興奮にむ れなくなつてしまつた」(4.10)。
58	大正十年 小學生日 記 1921	大橋進一(編)	博文館	1920.10.4	○	女	[前半]小学校6 年生。父、母、妹 と暮らす。[後半] 積善女学生。	1921.1.1-9.6	日記の前半と後半で執筆者が異なる。前 半は学校と家族の話題が中心。後半は別 人が使用、日記欄を駅名(立川、吉祥寺、 お茶の水)の書き方練習に用いる。
59	大正十年 重要日記	實業之日本社	實業之日本社	1920.10.15	○	男	不明。	1921.1.1-10.19	天候、その日の出来事、金銭の出納がご く簡潔に記される。
60	大正十年 當用日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1920.9.5		女	高等女學校生。 奥羽在住。	1921.1.9-8.4	「女學校に這いながらたつた三年で止め る人があるけれど、私は進めるところまで 進みたいと思いますわ。こつちの人達は高 等學校迄行けばおよめに行くのが遅くな ると考えている人が多いよだけけれど」(8.2) 等、兄への手紙の下書きあり(8.1-8.4)。
61	大正十一年 新當用 日記	共同出版社編 輯局(編)	共同出版社	1921.8.15			化学関連企業に 勤務か。	1922.1.1-4.5	ゴム製造、販売、輸出入を取り扱う企業 訪問について記すことが多い。
62	大正十一年 當用日記	大橋進一(編)	博文館	1921.10.4		男	不明。	1922.1.1-12.25	日々の出来事の簡潔な記録。
63	大正十一年 新文章 日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1921.11.5	○	男	学生。18歳。	1922.1.1-5.5	学校生活の記録。「読書」欄にも『中央公 論』等の雑誌を中心にまめに記録。
64	実用ポケット日記	積善館編輯所 (編)	積善館	1922.9.5		男	不明。	無し	日記ではなくメモ帳として使用。1950年 代のメモ書きも含む。
65	家計日記	博文館(編)	博文館	1922.10.4	未使用				
66	少女日記	婦人之友社編 輯局(編)	婦人之友社	1922.11.15	○		静岡県浜松市在 住。	未使用	表紙に氏名が記されるが、中身は未使用。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
67	少年日記	婦人之友社編輯局(編)	婦人之友社	1923.11.20			未使用	「精一ばい運動したあとでは、ドカリと腰を下ろして暫く休むことが必要である。甘いものを食べたあとでは、お茶をのまなくてはならない。少年諸君の快活な一日の終らうとする時に、一人静かに日記に向う十分間は、諸君の日々の生活に最もよいすべくくりをつけるものである。明日の楽しい希望も計画も自然とそこに湧き出してくる」(前書きより)。	
68	1924 常用日記		積善館	1923.9.5		女	主婦。	1924.1.1-12.31	夫と子供に関する話題が多い。
69	大正十三年 新文章日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1923.11.20		男	文筆業か。東京在住。妻子あり。	1924.1.1-1.21	「新聞と雑誌を見た外、終日子供と遊ぶ。献題は『新年言志』とあるが若しほんたうに自分の思つてゐることを言つたなら、警視庁あたりからくりに来るだらう」(1.2)。
70	懐中日記	積善館編輯所(編)	積善館	1923.9.5		男	農学校生。	1924.1.29-6.5	農学校生の日常が綴られる。1月1日から28日迄の日記の部分が破られている。
71	大正十四年 常用日記	博文館(編)	博文館	1924.10.4			未使用		横書き用の日記帳。
72	演芸趣味日記	渥美清太郎、河竹繁俊(編)	春陽堂	1925.12.14			未使用		「日本演劇略史」「舞踊細見」「観劇備忘録」等の附録も充実した日記帳(同じものが2冊あり)。
73	農場日誌	岩瀬博之	東京光原社	1926.2.15			未使用		はしがきに「日進月歩の今の世は チョン曲げ時代と一寸違ふ 學理を實地に應用する 之れが大正の實農夫」とあり。
74	大正十五年 常用日記	博文館(編)	博文館	1925.10.4		男	不明。	1926.1.1-12.31	日々の出来事の簡潔な記録。
75	新文藝日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1925.11.1	○	男	新潟在住。	1926.1.1-12.9	俳句好き。父母との生活の記録が多い。新聞切り抜き、日記をメモした紙片の差し込みあり。
76	1927 小學生日記	安藤藤治郎(編)	積善館	1926.9.5			未使用		
77	横線 常用日記	博文館	博文館	1926.10.1			未使用		
78	大正十六年 ライオン 常用日記	小林富次郎	東京ライオン 齒磨本舗	1926.10.20			未使用		
79	文藝自由日記	鈴木氏亨(編)	文芸春秋社	1926.11.18		男	不明。	無し	日記帳の中段に「東洋の性論」と題された論考が書かれる。
80	現代文化日記 大正十六年	積善館編集所(編)	積善館	1926.9.5		男	行政関係者か。神戸周辺在住。娘がいる。	1927.1.1-8.13	「後日参考重要事項」欄にしばしば「部落支配制」と記載される。
81	大正十六年 懐中日記	博文館(編)	博文館	1926.10.4		男	学生(高等学校、あるいは専門学校か)。	1927.1.1-12.31	学生生活をつぶさに記す。奥付には大正十六年とあるが、恐らく急な改元に対処したため、扉には昭和二年の判が押される。
82	農家経営日誌 三重県農會編纂	三重縣農會(編)	記載なし				未使用		日記欄のほか、財産台帳等を含む。付録に記された東京府の自治体名から1928-32年頃発行の日記と推定される。
83	商店日記	倉本長治	誠文堂	1927.10.15			未使用		
84	新家庭日記 昭和三年	安東鼎(編)	鈴木商店出版部	1927.10.30			未使用		
85	昭和三年 齒科醫師日記	高津式	日本口腔衛生社	1927.12.10			未使用		
86	昭和三年 短歌日記	短歌雑誌編輯部(編)	紅玉堂書店	1927.12.15			未使用		
87	令女日記 昭和三年	藤村耕一(編)	寶文館	1927.10.25	○	女	高等女学校生。	1928.1.1-7.12	友人関係や人生の意味について悩むことが多い。
88	暑中休暇日誌 高等女學校用	日本教育研究會(編)	日本女性教育研究會	1928.7.12	○	女	高等女学校生。	1928.7.21-8.31	三版(初版1928.6.18)。家事、裁縫の記録が多い。明治大正文学全集(春陽堂)に読み耽り時間を忘れる(722)。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
89	夏期休暇日誌 尋常科第二學年		愛知師範同窓會	1928.6.15	○	女	尋常科第2學年2組。	1928.7.22-8.30	毎日「さんじゆつ」「よみかた」等の課題に加え、「はやおき」「おさうち」など、日替わりの学習課題が設けられる。
90	新家庭日記 昭和四年	安東鼎(編)	鈴木商店出版部	1928.11.3			未使用		
91	中學校、高等女學校用 夏季休暇日誌	國本清(編)	中學校日誌編纂會	1929.6.15			未使用		
92-1	昭和四年 當用日記	博文館(編)	博文館	1928.10.4	○	男	林業を営む。1892年生まれ。	1929.1.1-12.31	出張記録をごく簡潔に記す。利用交通機関名に合印が捺される。
92-2	昭和五年 當用日記	博文館(編)	博文館	1929.10.4				1930.1.1-12.31	
92-3	昭和六年 當用日記	博文館(編)	博文館	1930.10.4				1931.1.1-12.31	
92-4	昭和七年 當用日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4				1932.1.1-12.31	
92-5	昭和八年 當用日記	博文館(編)	博文館	1932.10.4				1933.1.1-12.31	
92-6	昭和九年 當用日記	博文館(編)	博文館	1933.10.4				1934.1.1-12.31	
92-7	昭和十年 當用日記	博文館(編)	博文館	1934.10.5				1935.1.1-12.31	
92-8	昭和十一年 當用日記	博文館(編)	博文館	1935.10.5				1936.1.1-12.31	
92-9	昭和十二年 當用日記	博文館(編)	博文館	1936.10.5				1937.1.1-12.31	
92-10	昭和十三年 當用日記	博文館(編)	博文館	1937.10.5				1938.1.1-12.31	
92-11	昭和十四年 當用日記	博文館(編)	博文館	1938.10.5				1939.1.1-12.31	
92-12	昭和十五年 當用日記	博文館(編)	博文館	1939.10.5				1940.1.1-12.31	
92-13	昭和十六年 當用日記	博文館(編)	博文館	1940.10.5				1941.1.1-12.31	
93	令女日記 昭和四年	藤村耕一(編)	寶文館	1928.11.15		女	役所勤務、東京近郊在住、母と暮らす。	1929.1.1-12.31	仕事のほか、母や知人について記すことが多い。関東大震災の記録(91)。「歳をとるのがいやになっちゃった」(917)等、加齢に悩むこともしばしば。
94	少女ダイアリー	藤村耕一(編)	寶文館	1928.11.15	○	女	小学4-5年生、大阪在住。	1929.1.1-4.29	学校生活や友人との交際について記す。「早く少女俱樂部がくればよいと思ひながら中々こないのでもつらなかつた 少女俱樂部はほんとに面白い 私は早くからまつてゐる」(3.9)。
95	昭和四年 自由日記		至誠堂書店	1928.11.20	○	男	会社員。妻、息子1人、娘2人あり。	1929.1.1-12.31	仕事、家庭、外出、食事の話題などが詳細に記される。巻頭の「前年記」にも月毎に細かな記録あり。しばしば日記に添えてその日に関心のあった新聞記事が貼付される。
96	家庭重宝日記 1929	都河竜(編)	婦女界社	1929.1.1		女	主婦か。	1929.1.1-12.31	『婦女界』第39巻第1号附録。掃除や洗濯などその日に済ませた家事の記録が中心。同じ日記帳がもう1冊あり(未使用)。
97	文藝自由日記 1929	文藝春秋社(編)	文藝春秋社出版部	記載なし		男	横浜高等商業学校1年生。	1929.1.1-12.31	寄宿寮生活の記録。友人関係の悩み、家族との不和、卓球部の活動。文部省の補助金を得た学内の「思想善導懇親会」に参加した記録あり(128)。
98	校外實習日誌		仙臺高等工業学校	記載なし	○	男	仙臺高等工業学校生、1928年入学。	1929.7.16-8.15	校外實習の記録。実習地は東京電燈株式会社岩室発電所(群馬県利根郡)。
99-1	夏休の日記	渦巻春藻(編)	學生文藝社	1929.7.9	○	女	甲府高等女学校1年3組	1929.7.21-9.1	十六版(初版 1929.6.1)。帰省生活が綴られる。
99-2	夏休の日記			記載なし			甲府高等女学校本科第4年3組	1932.7.21-8.31	夏休みの生活の記録。教師による添削とコメント多数。
100	昭和五年 訟廷日誌	竹内重固	竹内騰寫館	1929.11.14			未使用		「事件一覽」「中止中断事件一覽」等の記録欄が設けられる。巻末附録に「日本全国弁護士名簿」あり。
101-1	昭和五年 當用日記	博文館(編)	博文館	1929.10.4		男	不明。	1930.1.1-12.31	生活の克明な記録。妻の介護をする。毎日、「神仏に誦経感謝祈禱」をおこなう。
101-2	昭和七年 當用日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4				1932.1.1-12.31	
101-3	昭和十一年 半圓當用日記	博文館(編)	博文館	1935.10.5				1936.1.1-12.31	
102	趣味の日記	改善社編輯部(編)	改善社	1929.10.8			未使用		

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
103	新式育児日記	廣瀬興(編)	育嬰協会	1929.11.10			未使用	同じ日記帳が2冊あり。	
104	新家庭日記	安東鼎(編)	味の素本舗	1929.10.20		女か	不明。	1930.1.1-1.17	1月1-2日分の日記は破り取られている。ほぼ毎日、西條八十等の流行歌詞が日記代わりに記される。
105	常用日記 昭和五年	藤村耕一(編)	實文館	1929.11.15		女	主婦か。	1930.1.1-2.28	家庭生活の記録。自作と思われる歌も頻繁に記される。
106	俳人日記 昭和五年	日本俳書大系刊行會	春秋社	1929.11.15		男か	不明。	1930.1.1-9.4	ほぼ毎日、自作の句が記される。
107	少年倶楽部日記 少年倶楽部新年号付録			1930.1.1	○	男	中学生。1917年1月4日生まれ。大阪市住吉区在住。	1930.1.1-1.8	友人との交流が中心に記される。
108	山日記 一九三〇	松方三郎(編)	梓書房	1930.6.15			不明。	1930.6.15	富士山登頂記録のみ。同じ日記帳が1冊あり(一冊は未使用)。
109	昭和五年 新文藝日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1929.11.12			役所関係者か。	1930.11.1-11.6, 12.1-13	日記は書かれず、代わりに土地売渡契約書や在郷軍人会用の感謝状が下書きされる。ほか、「何故在郷軍人までが平素より戦争の準備をせねばならぬか」と題した小文あり(12.7)。
110	文藝自由日記	鈴木氏亨・齊藤龍太郎(編)	春陽堂	1925.11.18	○	女	主婦、妊娠中。	1930.12.6-1931.11.22	巻末の見返しに「昭和五年」とあることから、1930年用として使われた日記帳と判断。出産(1.5)と子育ての日記。「出産費用」の一覧あり(1.31)。
111	美術日記	石井柏亭(編)	中央美術社	1930.10.22		男	不明。	1930.12.26-1938.1.2	政治批評と日常生活の記録。病気がち。巻末付録に「美術便覧」あり。
112	書道日記 昭和六年度	長坂金雄	雄山閣	1930.10.30			未使用		和綴。凡例に「手本の文字は斯道の大家阪正臣先生に御願ひした」とある。
113	少年少女 譚海日記	少年少女 譚海編輯部(編)	博文館	1930.11.1			未使用		
114	商店日記	商店界社(編)	誠文堂商店界社	1931.1.1			未使用		非売品。
115	集印帖を兼ねた關西旅日記	河口由次	開隆堂書店	1931.4.25			未使用		名所旧蹟案内、感想録、ノート、スタンプ貼を兼ねた日記。
116	山日記 1931	角田吉夫(編)	梓書房	1931.5.10			未使用		
117	北國家庭日記 十月号	宮下與吉(編)	北國新聞社	1931.9.30			未使用		北國新聞特別付録。
118-1	昭和六年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1930.10.4	○	女	主婦、静岡県在住。	1931.1.1-12.31	三版(初版無記)。天候の記録を中心とした生活のごく簡潔な記録。ほぼ毎日、「さしみ」「まめ、魚」など、食材(あるいは食事)の内容が記録される。
118-2	昭和七年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4				1932.1.1-1932.12.31	二版(初版無記)。内容は同上。
118-3	昭和八年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1932.10.4				1933.1.1-1933.12.31	内容は同上。
118-4	昭和九年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1933.10.4				1934.1.1-1934.12.31	二版(初版無記)。内容は同上。
118-5	昭和十年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1934.10.5				1935.1.1-1935.12.31	内容は同上。
118-6	昭和十一年 家庭日記	博文館(編)	博文館	1935.10.5				1936.1.1-1936.12.31	
119	昭和六年 家計日記	博文館(編)	博文館	1930.10.4		男	学校教師。	1931.1.1-2.28	「本日の日記」「支払概要」「金額」で1日分が構成される家計主軸の日記帳。
120	昭和六年 重寶日記	博文館(編)	博文館	1930.10.4	○	男	〔二代目記入者〕慶應義塾大学生。	1931.1.1-1.7, 1942.8.22-1944.10.11	記入者(一代目)の死後、日記帳を譲り受けた親族が使用(二代目)。日記帳の見返しに恐らく最初の著者により「人生はお前の考へる様にONNAを目的とするのではない。さうかな?」と書かれる。二代目の著者により「さうかな?」が赤字の二重線で消され、「人生は努力せんが為の人生なり。努力して始めて人生を味ひ得たと云ひ得る」と反駁される。
121	研究社 新英文日記	研究社編輯部	研究社	1930.10.15		男	学生か。	1931.1.1-1.2	

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
122	ニコ〜日記		弘文社	1930.10.20		男	不明。	1931.1.1-12.31, 1932.1.1-12.31, 1933.1.1-12.31	3年間用。日々の出来事の簡潔な記録。
123	この一年一九三一年	横山隆(編)	寶文館	1930.11.15		男	大学生か。25歳。	1931.1.1-12.31	中扉に肖像写真。濃密な内面の記録。巻末の金銭出納帳に細かな記載あり。
124-1	自由日記 我が生活より		第一書房	1928.12.5		男	東京市役所勤務。子供がいる。	1931.1.1-12.31	使用年は1931年。子供の話題が多い。「主婦之友」や「改造」等の読書記録しばしば。「夜」文学時代を読む。何かすばらしい読物はないものだろうか。此頃の小説はあまりにくだらなさ過ぎる。少し何か書いて見たい気持はあるのだがどうも億劫だ。想を練ることすら面倒なのだから仕方がない(2.19)。
124-2	昭和八年 常用日記	博文館(編)	博文館	1932.10.4				1933.1.1-12.23	「社会のことや文学青年染た文学論などを九時頃まで続けた。こんな話をすると文学に対する熱を高められて創作欲がしきりに起って来る。今年こそ何か書上げて見たいものだ(1.15)。「中央公論」「改造」「サンデー毎日」など雑誌読書の記録多数。就職前に葡萄酒を飲む習慣がある。
125	自由日記 我が生活より	第一書房		記載なし		男	大学生。東京在住。	1931.1.1-1932.7.2	「女の子は可愛いとは私の偽はらざる告白だ 『告白だ』『偽はらざる』こんな言葉を何故使ふのだらう私は」「無為に昭和七年を終らんとしてゐる 前半の家庭生活後半の軍隊生活も残る何物もない 有るのは除隊のみ」(冒頭の白紙ページへの書き込みより)。
126	昭和七年 懐中日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4				未使用	
127	昭和七年 婦女日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4				未使用	
128	新撰 書道日記 昭和七年	長坂金雄(編)	雄山閣	1931.10.30				未使用	見開きの左頁に書道家による手本が掲載。
129	昭和七年 新文藝日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1931.11.20				未使用	
130	北國家庭日記 新年号		北国新聞社	1932.1.1				未使用	北国新聞特別号附録。
131	新式育児日記	廣瀬興	育嬰協会	1932.1.1				未使用	四版(初版 1929.12.6)。
132	譚海日記	少年少女譚海編輯部(編)	博文館	1932.4.15				未使用	巻末に「このノートを持つ人の心得」として、「このノートは自由に使ってください。文を書いてよし、繪を書いてよし、雑誌についての感想でもよし、もし面白いものができたら、どしどしと編輯あてにノートをお送り下されば、新しいノートをさしあげます」と謳われる。
133	楽しい懐かしい行楽日記	加藤儀一郎	京都萬成社	1932.5.15				未使用	旅行用の日記帳。
134	山日記 1932	日本山岳会(編)	梓書房	1932.6.10				未使用	
135	昭和七年 懐中日記	博文館(編)	博文館	1931.10.4	○	男	農業従事。埼玉県比企郡菅谷村在住。	1932.1.1-12.31	懐中日記の狭い日記欄にびっしりと書かれる。農作の記録のほか、血盟団事件党の事件や政党的趨勢、選挙結果など、政治への関心も高い。
136	女学生日記	平井佐兵衛(編)	國民出版社	1931.10.5	○	女	小学生、大阪在住。	1932.1.1-8.8	学校の授業内容、友人との交流を記す日が多い。読書好きで、「少女の友」、「少年世界」等を好む。毎日の天候を自作のイラストで示す。
137	中学生日記	改善社編輯部(編)	改善社	1931.10.8		男	中学生。山梨県甲府市在住。	1932.1.1-12.18	横書き用の日記。家庭や学校の出来事が綴られる。「夜は近所の子供や女中等でみかんまきをした」(1.4)。
138	向上日記	修養団	修養団	1931.11.10			機械工。	1932.1.1-12.29	織機の修理に関する記述がしばしば見られる。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
139	實用日記 1932	誠文堂(編)	誠文堂	1931.11.25		男	会社勤め、東京在住。	1932.1.1-9.7	会社生活の記録。毎日欠かさず起床時刻が記される。
140	昭和八年 横線 常用日記	博文館(編)	博文館	1932.10.4				未使用	
141	育児日記	オリオン社編輯部(編)	玉置合名会社	1932.11.1				未使用	非売品。育児日記としては用いず、冒頭の数頁に山村暮鳥「父上の御手の詩」など数編を書写したのみ。
142	新短歌日記 1933	短歌新聞社編輯局	立命館出版部	1933.1.1				未使用	
143	メンソレータム本舗編輯日記	諸川稔(編)	近江セールズ株式会社	1933.9.15				未使用	巻末に「メンソレータム御愛用家へお願ひ」と題したアンケートの呼びかけあり。
144	昭和八年 半圓常用日記	博文館(編)	博文館	1932.10.4		男	百貨店店員か。	1933.1.1-10.23	玩具部での毎日の仕事の記録。父を看取る(16)。
145	書道日記 昭和八年度	長坂金雄(編)	雄山閣	1932.11.10		男か	不明。	記載なし	日記欄には「お手本」欄と「清書欄」が設けられる。清書欄の多くが使用済み。
146-1	新常用日記 昭和八年	積善館編輯所(編)	積善館	1932.10.5		男	行政関係者か。関西在住。妻子あり。	1933.1.1-12.31	仕事の話題が中心。「支配執務」が頻繁に登場する。
146-2	常用日記	瀧本恭治郎(編)	改善社	1933.10.8				1934.1.1-12.23	
147	日記 1933		建設社	1933.1.1	○	男	大学生。	1933.1.1-12.13	大学を卒業し、就職した青年の気持ちの変化が書かれる。
148	昭和八年 農業日誌	文運堂(編)	文運堂	1932.10.25		男	農業従事。	1933.1.1-5.6	日々の記録は農作業の内訳を記す「農事」が中心で、「記事」欄がページ下部に小さく設けられる。
149	令女日記 昭和八年	笹島一夫(編)	寶文館	1932.11.10		女	23歳、東京近辺在住、看護婦または看護学校生。	1933.1.1-9.5	家族や親戚との交流の記録。産婆になることを目指す。4月以降、食事の記録がつけられる
150	昭和八年 軍隊日記	神田豊穂	春秋社	1932.11.10	○	男	海軍軍人。	1933.1.1-8.25	「今日も不相変猛烈な寒気で朝の短艇訓練のときは聊かではあるが雪が降りてみた」(127)といった具合に軍事訓練の日々が綴られる。「監修者の言葉」に、「軍隊生活のその日その日を書きとめて置いたら、後になつてどんなになつかしい思出になるかも知れまい」とあり。
151-1	育児日記	オリオン社編輯部(編)	玉置合名会社	1932.11.1		女	青森県在住。	1933.2.23-5.13	長男九十九の誕生と成長の記録。
151-2	育児日記	オリオン社編輯部(編)	玉置合名会社	1934.4.10				1935.2.25-26	
152	その日その日	武田春夫(編)	寶文館	1933.11.10		男	不明。	1933.4(日付無)	伊勢参拝の記録。
153	昭和八年 新日記		日本評論社	1932.11.20				1933.5.4-5.7	学習記録や美術評論の抜粋など、メモ用途で使われる。
154	昭和五年 小生日記	博文館(編)	博文館	1929.10.4		男	小学生。	1933.6.16-6.26	1930年用の日記帳を33年用として用いる。執筆期間中はほぼ毎日、菌磨きの記録(「ハミガケリ」、「ハミガカズ」)あり。1月上旬の日記が破られている。巻末ノートに1942年4月付の書き込みあり。出征中の親戚への心配が綴られる。
155	山日記 1933	日本山岳会(編)	梓書房	1933.6.1				1933.8.16-20	日記欄は5月末日までしかないので、メモ欄を利用して登山記録が書かれる。登山中に摘んだと思しき数本の草花を押し花にして空白ページに挿入である。
156	釣り日誌	村上静人(編)	元光社	1933.10.1				未使用	巻末に釣りガイドあり。
157	昭和九年 常用日記(兵庫縣)	柏佐一郎(編)	三省堂	1933.10.5				未使用	
158	ニコ〜日記		弘文社	1933.10.10				未使用	
159	俳句日記 昭和九年	山本三生(編)	改造社	1933.11.11				未使用	

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項	
					氏名	性別	属性			
160	山日記 1934	日本山岳会(編)	梓書房	1934.6.1		男か	不明。	記載なし	登山用のメモが記されるのみ。	
161	昭和九年 半圓當用日記	博文館(編)	博文館	1933.10.4		女	役所勤務。東京在住。	1934.1.1-10.6	母や姉とよく外出し、買い物をする。「役所へ務める様になつてからの位給料をもらつたか概算して見た」(9.19)。	
162-1	1934 卓上日記	岡本碩雄(編)	伊東屋	1933.10.10		男	職務上で天文学に関わる。静岡県在住。	1934.1.1-12.31	天文観測の記録が多数あり。ほか、天文学者(神田茂等)との面会の記録もしばしば。	
162-2	昭和十年 OS 卓上日記	岡本碩雄(編)	OS 岡本ノート	1934.10.5				1935.1.1-12.31		
162-3	昭和十一年 卓上日記	土田豊治(編)	東洋ノート製造株式会社	1935.10.5				1936.1.1-12.29		
162-4	卓上 合理日記	教育研究会(編)	日本ノート学用品株式会社	1936.9.5				1937.1.1-12.31		
162-5	1947 卓上日記		記載なし	1947.1.1-12.29						
162-6	1948 卓上日記		記載なし	1948.1.1-12.31						
162-7	1948 卓上日記		静岡谷島屋出版部	記載なし				1949.1.1-12.31		1948年用の日記を49年用に転用したものの(表紙の西暦を手書きで訂正)。内容は同上。
162-8	1950年 卓上日記		記載なし	1950.1.1-12.26				内容は同上。		
162-9	1951 卓上日記		記載なし	1951.1.1-12.27						
162-10	1952年 卓上日記		記載なし	1952.1.1-12.28						
162-11	1953 国華 卓上日記		文運堂	記載なし				1953.1.1-12.18		
162-12	1954 コカカ卓上日記		文運堂	記載なし				1954.1.1-12.18		
162-13	1955 国華 卓上日記		文運堂	記載なし				1955.1.1-12.31		
162-14	1956 卓上日記		東京積善館	1955.10.10				1956.1.1-12.31		
162-15	1957 卓上日記		積善館	1956.10.10				1957.1.1-12.31		
162-16	1958 DESK DIARY		記載なし	1958.1.1-12.31						
162-17	1959 CALENDER		記載なし	1959.1.1-12.31						
162-18	1960 国華卓上日記		文運堂	記載なし				1960.1.1-12.26		
162-19	文栄堂の卓上日記 昭和三十六年		文栄堂	記載なし				1961.1.5-12.31		
163	少年少女生活日記 昭和九年	婦人之友社編集局(編)	婦人之友社	1933.11.15		女	聖心女学校生。	1934.1.1-8.4	学校生活の記録が主。浅間山の噴火に関する言及あり(8.4)。	
164	FIVE YEARS PRIVATE DIARY		記載なし			男か	不明。	1934.1.1-12.31	鍵付きの横書き日記帳(5年間用)。1日の日記欄はごく狭い。日々の出来事が簡潔に記される。	
165	昭和九年 経済日記		栗田書店	1933.11.15		男	電工か。	1934.1.6-2.9	電線の取り扱いに関する記録が多い。	
166	新日記 1934		日本評論社	1933.11.20		男	東京在住。	1934.1.31-6.29	仕事の内容を簡潔に記す。未記入日も多い。「景品付回数券賞出しノ為、一日忙しく送る。寝たのは一時過ぎて居た」(4.29)。	
167	昭和九年度 釣日記	刀禰館正雄(編)	朝日新聞社	1933.10.15		男か		1934.4.3, 4.27-4.29, 5.27, 7.1-7.2	7日間の釣りの記録。釣場、目的魚、釣方、仕掛、収穫、同行者を記す。	
168	昭和十年 當用日記	由多仁吉之助(編)	国民出版社	1934.10.5			未使用			
169	昭和十年 當用日記	博文館(編)	博文館	1934.10.5			未使用			
170	昭和十年 時間日記	大塚桂三(編)	田中宋英堂	1934.10.15			未使用		日記欄は朝5時から夜12時まで1時間毎に区切って設けられる。	
171	昭和十年 経済日記	高垣五一(編)	野村証券	1934.10.15			未使用		日記欄下部に「證券こよみ」があり、前年の同じ日付の相場を確認できるようになっている。	
172	信毎便覧日記 1935			記載なし			未使用		和綴じ。1935年1月用の日記。	
173	昭和十年 當用日記	三省堂編集所(編)	三省堂	1934.10.5		男	林業関係。	1935.1.1-12.31	林業、農業、養蚕の記録。	
174	昭和十年 小學生日記	博文館(編)	博文館	1934.10.5		男	炭作りが生業か。	1935.1.1-1935.12.31	父と2人、炭作りに励む。買い物の記録もしばしば。小学生向けの日記帳だが、書き手は大人である。	
175	昭和十年 家庭日記	有隣生命保険(編)	有隣生命保険	1934.11.1		男	会社員。	1935.1.1-12.31	その日の出来事が仕事内容を中心に箇条書きで書かれた日記。	

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
176	クラブ淑女日記 1935	後藤虎之助 (編)	中山太陽堂	1934.12.1		男	株取引に携わる か。	1935.1.1-3.18	「仕掛」に関する記述が多い。相場、株式にも関心が高い。バルカン問題やブルガリア問題など国際情勢への言及も多い。
177	文藝自由日記 1935	鈴木氏亨(編)	文芸春秋	1934.12.5			小学校教師。	1935.1.1-1936.3.3	仕事の記録が中心。「生涯伸びて伸びてあかないはくは生涯がたのしみで輝く」(日付無)。
178	昭和十年 一日一 想の日記	教育資料株式 会社(編)	教育資料株式 会社	1934.10.15	○	女	36歳、京都市 上京区在住。	1935.1.5-12.10	「近來、自分を省みるとき勉強してないことに驚く。午前中は新聞を見ることと當面の用事するのみ。日記もつけない金銭出納も読書もしない習字もしない。それでゐてあれもしたいあれも読みたいと思ふ」(2.16)等、自己反省を記すことが多い。
179	昭和十年 令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1934.11.20	○	女	諏訪高等女学校 2年生。長野県 下諏訪町在住。	1935.4.15- 1935.12.31	1月1日～4月14日までの日記を記したページは全て切り取られている。学校生活、友人、家族関係を中心に記す。巻末の金銭出納表に詳細な記録あり。
180	日新録	伊藤重治部 (編)	栗田書店、大 東館	1934.11.24		男		1935.5.18-1937.1.5	3年用の日記帳。「痛む足をいたはりつつ丸ビルへいく」(1936.10.10)。
181	昭和十年 軍隊日記	櫻井忠温(編)	松柏館書店	1934.11.10		男	軍人。	1935.8.15-1935.9.2	馬術等の軍事演習に励む様子が記される。
182	昭和十一年 経済日記	高垣五一(編)	野村證券	1935.10.15			未使用		付録に「主要経済統計」「放資家参考資料」。
183	俳句日記	山本三生(編)	改造社	1935.10.20			未使用		岩波新書・文庫・全書の目録が日記欄に書き写されている。
184	昭和十一年度 釣日記	星野辰男(編)	朝日新聞社	1935.11.15			未使用		
185	図書日記・古本日記	古典社編集部 (編)	古典社	1936.1.1			未使用		
186	俳句浄書日記	栗林彰(編)	東洋閣	1936.11.15			未使用		
187	昭和十一年 歌劇日記		寶塚少女歌劇 團	1935.11.20		女	会社勤務。17歳 (1936年時点)。京 都在住。歌劇好き。	1936-1942	1936年用の日記に、1942年までの日記が順不同で追記される。映画鑑賞、歌劇鑑賞、友人との交流が主に綴られる。
188-1	NOTEBOOK		市販のノート			男	高等師範学校生 (在東京)、36年 4月より中学校 教師(在大阪)。	1936.1.1-2.29	卒業論文を執筆中。教生の活動記録。しばしば読書記録、映画鑑賞、音楽鑑賞の記録。二・二六事件の感想あり。
188-2	NOTE=BOOK							1936.3.1-5.13	大阪赴任のため東京を発つ(3.23)。途中、京都に滞在(3.24-30)。二・二六事件や広田弘毅内閣の成立に関する感想あり。
188-3	TEIDAINOTE							1936.8.23-11.23	「中央公論」や「改造」に掲載された小説の感想あり。
188-4	(無題)							1941.1.1-6.20	教師生活の記録。
189	昭和十年 令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1934.11.20		女	看護学校生か。	1936.1.1-12.31	学生生活と病院勤務の記録。1935年用の日記を36年用にしたもの。背表紙の「昭和十」に「一」を書き足している。
190	昭和十一年 英文當 用日記	博文館(編)	博文館	1935.10.5		男	不明。	1936.1.1-12.17	英語で書かれた日記。しばしばテニスをやり、観戦する。友を失う(1.15)。
191	昭和十一年 袖珍當 用日記	博文館(編)	博文館	1935.10.5		男	不明。	1936.1.1-12.31	仕事の内容を中心に、日々の出来事が簡潔に記される。
192	昭和十一年 その日そ の日記	武田春夫(編)	寶文館	1935.11.15		男	学生。下宿生活。	1936.1.1-1.5、 5.8-6.8	肉親を亡くした淋しい正月。健康状態がやや悪い。勉強に対する意欲を表明。
193	1936版 文藝行動日 記	文藝家協会 (編)	サイレン社	1935.12.12		不明	不明。	1936.1.1-1.6	時が過ぎる速さに対する感慨が年頭に記される。
194	青年日記 2596	熊谷辰治郎 (編)	日本青年館	1935.12.20		男	会社勤務、青梅 在住。	1936.1.1-11.23	再版(初版 1935.9.10)。仕事や時事的話題について思うところを細かく記す日が多い。
195	カメラ日記		第一書房	1935.12.5		男か	不明。	1936.1.12-12.11	被写内容の記録。同じものが2冊あり、1冊は未使用。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
196	昭和十一年十月十六日 茶冠の榊培養日記		自家製和綴			男	不明。	1936.10.16- 1937.10.18	手製の和綴。人から譲られた二株のかし わの培養日記。順調に育ち、遂には「可 愛らしい小華を見せる迄」(日付無)になる。
197-1	昭和拾壹年度 生徒 日記		記載なし		○	男	東京府立第4中 学校生徒第5学 年	1936.4.4- 1937.4.26	一高受験するも失敗。
197-2	昭和拾貳年度 生徒 日記						東京府立第4中 学校生徒第5学 年。	1937.4.1-1938.2.8	37年4月に匝欧連絡飛行に成功した神風 号への感激。早慶戦。一高受験するも失敗。
197-3	全国日記						受験浪人生。	1938.4.8- 1939.8.21	上記執筆者の浪人生活の日記。友人や父親 からの慰めの手紙もあり。「今日ぞ歡喜の 日!! 暗い灰色の生活の凡てを棄てて合格の 喜びに没入の日。我今天下の一高生為り。 柏葉の下集ひ来る秀才に勝って味ふ合格の 感激!!! 唯涙に曇る白線の帽子」(1939年 4月6日)。ほか、富士登山紀行あり。
198	養蠶日記	中島善爾(編)	中島書院	1936.4.10	○	男	會津農林学校2 年甲組。	1936.5.10- 1936.6.11	十三版(初版 1930.7.20)。養蠶に関わる天 気や気温等の記録。
199	昭和十二年 經濟日記	高垣五一(編)	野村証券・大 阪信託	1936.11.1			未使用		付録に「主要經濟統計」「放資家參考資料」。
200	昭和十二年 主婦日記		婦人之友社	1936.11.1			未使用		
201	カメラ日記		第一書房	1936.12.5			未使用		
202	誕生より學齡まで 育児日記	日本育児研究 会(編)	昭和圖書	1936.12.15			未使用		巻末に「育児総覽」の付録。
203	昭和十二年 釣日記	星野辰男(編)	朝日新聞社	1936.12.12		男	釣愛好家。	記載なし	日記は書かれず、良い釣り場に関する覚え 書きや雑誌からの写し書きが留められる。 釣りに適した天候に関するメモもあり。
204-1	自由日記 1937	三省堂編輯所 (編)	三省堂	1936.10.5		男	大学生。東京在 住。	1937.1.1- 1937.12.31	大学予科を終えて本科へ進学する。大学 生活、友達、家族に関する記述が多い。
204-2	自由日記 2600	三省堂編輯所 (編)	三省堂	1939.10.5			大学生。4月か ら会社勤務。東 京在住。	1940.1.1- 1940.11.5	卒業論文執筆。4月以降は会社勤めの生 活が書かれる。
204-3	昭和十八年 ライオン 常用日記	小林喜一(編)	ライオン歯磨 本舗	1942.11.5			会社勤務、東京 在住。	1943.1.1- 1943.12.31	青山病院へ眼の治療に通う。電機関連の 仕事や趣味の植物栽培について記すこと が多い。
205	昭和十二年 小學生 日記	博文館(編)	博文館	1936.10.5		女	小学5-6年生。 横浜市在住。	1937.1.1-4.23	「今日は朝からあはただしい。それは宇垣 大将のことである。何つて陸軍は馬かな んだらう。私はくやしかつた。そして日本 の國のためをすこしもかんがへない無法 者の陸軍のために陛下はどんなに御心配 だらうか」(126)。
206	昭和十二年 常用日記	博文館(編)	博文館	1936.10.5	○	男	川端画学校生。	1937.1.1-6.20	彫刻制作に対する自分の姿勢。画学校生 としての生活の記録。
207	昭和十二年 半圓當 用日記	博文館(編)	博文館	1936.10.5		男	東京在住。	1937.1.1- 1937.12.31	食事や観劇など、外出の記録を簡潔に記す ことが多い。「銀座ノビーヤホールデ生ビ ールヲ飲ム」(3.3)。読書への関心も示され、 「吉屋信子の小説『良人の貞操』いよいよ 佳境に入る」(121) 等言及される。
208	昭和十二年 ライオン 常用日記	小林喜一(編)	ライオン歯磨 本舗	1936.10.28		男	京都在住。	1937.1.1-1.5	
209	歌劇日記 昭和十二 年		寶塚少女歌劇 團	1936.12.10		女	会社勤務。寄宿生 活。東京在住か。	1937.1.1-10.30	歌劇鑑賞の記録が多く、サーカスの話題 も登場。
210-1	令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1936.11.15		女	女学校を卒業 後、病院に就職。	1937.10.31-12.31	病院の「先生」への思いが綴られる。「い くら好きでも結婚できる可能性のない人と 恋し愛される事はよくない」(111)。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
210-2	昭和十三年 令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1937.11.15			病院勤務。	1938.1.1-1938.11.1	
211	茶道日記	佐々木敬一	河原書店	1938.1.1			未使用		
212	むらさき 歌日記 紅梅集	波多野重太郎(編)	むらさき出版部	1938.1.1			未使用		
213	新生日記		新家計日記發行所	1938.1.1		男	教員か。東京在住。	1938.1.1-12.31	主に金銭出納帳として使用、日記欄の記入日は少ない。「築地小劇場に新協劇團の『夜明け前』第一部のマチネーを観に行く。気の毒な位の入りしかないのはどうした譯か。期待が大きすぎたせいかな。半蔵の婚禮の場がわづかに印象づけられた位だったのは淋しかった」(11)。
214	楽久我記	新正堂(編)	新正堂	記載なし。		男	妻と子(長女、長男、次男、三男)あり。神田区在住。	1938.1.1-12.31	家族の話題が多い。
215	當用日記	瀧本恭治郎	改善社	1937.10.8			保険事務に携わる。	1938.1.1-12.31	ほぼ毎日「保険事務」の内容が書かれる。ほか、「重要記録」欄に今寺ハイキングの記録あり(9月19日)。
216	女性日記		改善社	1937.10.8		女	主婦か。	1938.1.1-9.12	子育ての記録が中心。
217	昭和十三年 時間日記	大塚桂三	大阪宋茶堂	1937.10.20		男	中学生。新潟に下宿。実家は小樽。	1938.1.1-1938.12.1	中学4年生から5年生にかけての日記。兄姉への言及が多い。映画鑑賞の記録しばしば。
218-1	一善日誌 第1號		記載なし		○	男	第7中隊第3班。	1938.12.1-1939.3.21	入營の日からの日記。
218-2	一善日誌 第2號							1939.3.22-6.30	表紙に幹部候補生である旨記される。
218-3	一善日誌 第3號							1939.7.1-?	日記はつけず、メモ帳代わりに使用。
218-4	一善日誌 第3號							1939.8.11-10.11	第3號の2冊目。
218-5	修養録						第1中隊第2區隊。	1939.11.1-1940.3.11	家族写真あり。
219	昭和十四年 婦女日記	博文館(編)	博文館	1938.10.5			未使用		
220	昭和十四年 日誌兼 用家計簿	松本信一(編)	大阪貯蓄銀行	1938.11.15			未使用		
221	昭和十四年 印刷日記 附最新印刷百科便覧	印刷情報編輯部(編)	印刷出版研究所	1938.12.5			未使用		最新印刷百科便覧の付録つき。印刷会社の広告が多数掲載。
222	カメラ日記		第一書房	1938.12.5			未使用		十四年版(十一年版 1935.12.5)。
223	昭和十四年 電氣商業日記	電氣之日本社(編)	電氣之日本社	1938.12.20			未使用		
224	釣日記 昭和十四年度	朝日新聞社(編)	朝日新聞社	1938.12.20			未使用		巻末に釣りガイドあり。同じものが二冊あり。
225	陣中日記	軍用図出版社(編)	軍用圖書出版社	1939.3.10			未使用		日記欄はごく狭く、千人針をする女性の写真、中国の風土に関する読み物、軍歌浪曲、川柳等が大部分を占める。
226	昭和十四年 當用日記	博文館(編)	博文館	1938.10.5	○	男	73歳、新潟県見附市在住。	1939.1.1-8.15	未記入の日も多い。株取引の記録しばしば。
227	小學生日記	龜井豊治(編)	三省堂	1938.10.5	○	男	7歳、兵庫県在住か。	1939.1.1-2.4	毎日のように住吉神社に参拝。学校生活や中学受験のほか、興味があるのか兵隊に関する話題も多い。
228	令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1938.11.15		女	会社勤務2年目、長野在住か。	1939.1.1-2.5, 3.1-3.0, 4.1-4.6, 5.16-5.28, 6.11-6.22, 7.7-7.18, 11.5-11.30, 12.1-1939.12.8	会社勤め、友人関係など。チョコレート好きなのか、日記中にしばしば言及がある。巻末の「金銭出納帳」に詳細な書き込みあり。
229	研究社英文日記	研究者編輯部	研究社	1938.11.25		男		1939.1.1-12.31	英文で綴られた日記。日記帳最後に和文で一年の回顧を書き、母の信用を失い死を思ったと記す。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
230	学徒日記	内田武夫(編)	学徒保育聯盟中央會	1939.4.1	○	男	鹿児島県立加治木工業学校建築科第3学年	1939.4.1-11.11	学校生活の記録。しばしば自作の詩を取録。
231	園藝日記 昭和十五年	博文館(編)	博文館	1939.10.5				未使用	
232	昭和十五年 軍隊日記	油谷守康(編)	國民出版社	1939.10.5				未使用	
233	昭和十五年 朝日日記	樋口正徳(編)	朝日新聞社	1939.10.5				未使用	巻末の付録(あるいは住所録) 数頁を切り取った形跡あり。
234	昭和十五年 當用日記	博文館(編)	博文館	1939.10.5				未使用	
235	向上日記 昭和十五年	修養園	修養園	1939.10.20				未使用	
236	昭和十五年 家計日誌	松本信一(編)	大阪貯蓄銀行	1939.11.15				未使用	
237	カメラ日記		第一書房	1939.11.20				未使用	十五年版(十一年版 1935.12.5)。
238	白百合日誌		大阪府立泉尾高等学校	記載なし	○	女	高等学校最終学年。大阪在住。父(歯科医師)、母、妹2人、弟。	1940.1.1-12.31	学校、家族、友人関係等の記録。「節米昼食の時、いつも祖母様がパンを食べるのでついでに皆パン食。パン食といつてもバターをずとつける事は経済的にかさばりその上近頃北海道バターが少く人造バターばかりなのでパンの時キヤベツをやらかいのゆでじゃがを少しゆでてでパンにそへて食べる事」(82)。
239-1	昭和十五年 朝日日記	樋口正徳(編)	朝日新聞社	1939.10.5		男	不明。	1940.1.1-12.31	日々の仕事に関して箇条書きで簡潔に書かれた日記帳。
239-2	昭和十六年 朝日日記	樋口正徳(編)	朝日新聞社	1940.9.30				1941.1.1-12.31	
240	當用日記 昭和十五年	目黒十郎	長岡目黒書店	1939.10.5		男	鉄道職員。	1940.1.1-12.31	「上下各列車共定時運転ス」(213)等、鉄道の運行業務を毎日欠かさず記す。
241	つれづれ日記	三省堂編輯所(編)	三省堂	1939.10.5	○	男	群馬県勢多郡北橋村橋北国民学校の訓導。	1940.1.1-5.20	日々の出来事の簡潔な記録。日記帳冒頭には「人生雑感」「歩み求めるもの心」等の作文がある。「苦しかった私の過去悶え通した私の過去、それは凡て夢である。思ひ出である。所謂人生は夢である。人生の夢から詩が生れ藝術が生れ信仰が生れる。こゝにのみ人生がある」(「人生雑感」より)。
242	ニコニコ日記 國策版	牧野元次郎(編)	弘文社	1939.10.20		男	大阪在住か。	1940.1.1-1.12	
243	昭和十五年 小學生日記	油谷守康(編)	國民出版社	1939.11.5		女	小学生。京都在住。	1940.1.3-8.23	学校生活や友達付き合いが中心に記される。
244	歌劇日記 昭和十五年 版		寶塚少女歌劇團	1939.12.1	○	女	宝塚歌劇団員。	1940.1.1-12.13	「今日は初日!! 初日には入りが無い道成寺のコーラスが合はない。実に憂うつなる揃ひである。何時になったら解決するだらう。明日十時からコーラスのお稽古がある」(3月、日付なし)。巻末の「知友名簿」には「私の死後はこの日記は焼き捨て下さいね」と書かれる。
245	昭和十五年 重寶日記	博文館(編)	博文館	1939.10.5	○	男	海軍軍人。	1940.7.4-1942.9.12	松江に転任(1940.7.4)。「真剣に、真実を、愛を追求してゐながら、現在の生活に自信も真剣もない。淋しい事だ」(同 7.5)。松江を離れ中国へ(同 8.8)。上海にて「愈々前線に出る」ことを実感(同 8.19)。「幾多の彼我の生魂を昇天せしめ青春の紅き血を吸ふその土地。こんな大きな罪悪をある一部の人類の繁栄、享樂の爲に日支両国人に犯さしめる事が許容さるべきではない」(1941.3.10)。
246	昭和十六年 婦人日記	樋口正徳(編)	朝日新聞社	1940.9.30				未使用	
247	家庭生活日記 昭和十六年用	石川武美(編)	主婦之友社	1940.10.5				未使用	
248	昭和十六年 つはもの日記	陸軍美術協會(編)	軍事普及會	1940.11.20				未使用	

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
249	令女日記	武田春夫(編)	寶文館	1940.11.15			未使用		
250	歌劇日記 昭和十六年版		寶塚歌劇團	1940.12.5			未使用		
251	戦陣日記	大石仙太郎(編)	清教社	1941.5.5			未使用	軍歌、勅語、訓戒あり。	
252	組員必携 隣組常會日誌 附回覧板のひかへ	隣組常會研究会	隣組常會研究会	1941.7.25			未使用		
253	昭和十六年度 釣日記	松崎明治(編)	朝日新聞社	1940.12.25		男	不明。	1941?9.4-10.17, 1945.9.20, 1946.3.19-6.15, 1947.2.23-25, 1948.3.10-5.17。	釣果の記録。花や友人を写した写真ネガが10枚差し込まれる。
254	昭和十六年 學生日記	博文館(編)	博文館	1940.10.5		男	大学受験生。	1941.1.1-9.19	慶應義塾への進学への熱意(11)、合格発表日を迎えるも落第(3.20)、のち、目黒高等予備校へ。
255	昭和十六年 當用日記	博文館(編)	博文館	1940.10.5	○	男	越後見附町在住。	1941.1.1-12.30	罪線を無視した大きい字で書かれる。毎日の天候の様子と変化について細かく記す。無記入の日も多い。しばしば日銀、三井銀、三越等の利付が記される。
256	小學生日記	三省堂編輯部(編)	三省堂	1940.10.5	○	男	中学生。13歳。	1941.1.1-4.11	使用者の写真あり。元の書名は「小学生日記」だが、「小」の字に「中」を上書きし、中学進学以降も使用。
257	昭和十六年 學生日記	博文館(編)	博文館	1940.10.5	○	男	中学生。	1941.1-12.31	中学生生活が詳細に記される。進学を希望。日米開戦について「こんな事が起らうとは、夢にも思はなかつた」(12.8)。
258	鍛練日誌 昭和十六年度	辻村誠之(編)	東京私立高等女學校協會	1941.7.5	○	女	東京成徳高等女學校第4学年。	1941.7.23-1942.1.4	夏期・冬期休暇の記録。「ランボウ作の”地獄の季節”をよんだがほやつとしてゐるのでなんのこたか意味がよくのみこめなかつた。たゞ詩人の感じより雑多な価値の影像が殆ど筋金入りとても形容したい様な腕力で強引に連結されて、どれも男らしい強い印象を私にあたまました」(1941.7.30)。「空襲のことでみんなさはぐ、なにどうせされるときはみんなされるのだと思って私は別になんともない」(同 8.27)。
259	戦陣日記	大石仙太郎(編)	清教社	1941.10.5	○	男	軍人、極第2906部隊。住所は東京市滝野川区。	1941.11.9-1943.12.12	中国奏皇島にて病院船「ぶえのすあいい丸」に乗船(1942.11.28)。帰国して療養生活を送る。
260	戦友日記 昭和十七年版	住喜代志(編)	軍事普及會	1941.11.3			未使用		
261	昭和十七年 つはもの日記	陸軍美術協會(編)	軍事普及會	1941.11.8			未使用		
262	昭和十七年 電氣商工日記	瓜坂正博(編)	大阪電氣新聞社	1941.11.30			未使用	巻末に電機製作所の広告が多数掲載される。	
263	家庭日記 昭和十七年	諸川庄三(編)	近江セールズ株式会社	1941.12.20			未使用		
264	歌劇日記 昭和十七年	小笠昇(編)	寶塚歌劇團	1941.12.25			未使用		
265	昭和十七年 釣日記	松崎明治(編)	朝日新聞社	1942.1.5	○	男	不明。	未使用	釣りのガイドが主要部を占め、日記欄はごくわずかの日記帳。
266-1	自由日記	三省堂編輯所(編)	三省堂	1941.10.5	○	男	武蔵高等工業學校機械科第2学年。	1942.1.1-1954.4.12	断続的に10年以上書かれた日記(入隊時期を除く)。「学校ニ於テハ徴兵検査ノ話ニ花ガ咲ク」(1942.4.13)、「幹部候補生採用願ヲ書ク 全部失敗」(同 4.14)、「明日レントゲン検査 願ワクハ甲種ナル事ヲ欲ス」(同 4.15)。徴兵検査の証明書や哲学書の書名メモなど複数あり。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
266-2	軍隊日記		記載なし				所属部隊未詳。	1942.10.1-1943.4.10	軍隊入営日からの日記。巻末に1942年10月2日より43年2月24日までの「自己体重表」あり(約5.5kg増加)。
266-3	軍隊日記		記載なし				中部第41部隊。	1943.11.15-1945.8.4	精神論を綴ることが多い。「一昨日武道とは死ぬ事と見付けたりとの名句を思い出す。誠に小生に取って幸なる言を知り得たり」(2.13)。敗戦の直前で記録とまる。「吾々は戦に勝たねばならぬ。吾々は状況不利になればなる程其の行動を慎しみ、身を修むる如く志ねばならぬのである」(1945.8.4)。
267	昭和十七年 當用日記	博文館(編)	博文館	1941.10.5		男	海軍軍人か。	1942.1.1-11.7	魚雷命中(114)、砂糖不足(126)、米作不安(89)について記される。
268	少國民日記	田中宋榮堂編集部(編)	田中宋榮堂	1941.10.20	○	男	1933年生まれ。京都市上京区在住。父は教師。	1942.1.1-8.8	家族(特に兄)、学校生活、戦争に関する話題が中心。
269	主婦日記 昭和十七年用	羽仁もと子	婦人之友社	1941.11.10	○	女	主婦。	1942.1.1-8.21	1月中の日記には料理の献立が頻繁に記される(例:1月19日、朝、キャベツ味噌汁、昼、メザシ、夜、浅利ライスカレー)。「初の空襲サイレン鳴る」(3月第1週目)。
270	花の日記	中原淳一	ヒマワリ出版部	1941.12.25		女	高等女学校生。	1942.1.1-11.24	友人関係の悩みなど、学校生活が書かれる。
271	海軍日記 昭和十七年版	興亜日本社(編)	興亜日本社	1941.12		男	軍人か。実家は福井県鯖江。	1942.1.13-1.17	戦死した兄の葬儀の様子が記される。「アノ元氣ナ兄サンガ今ハ白木ノ箱デ無言ノガイセンヲスルノカト思ヘバ万感胸ニセマツテキテ涙ヲ禁ジ得ナカツタ」(1.14)。
272	育児日誌		東京地方通信局		○	男	乳児の父、埼玉県熊谷市在住。	1942.9.20-11.3	父親による育児日記。執筆期間は年月日ではなく、誕生からの日数で記される。
273	昭和十八年 當用日記	博文館(編)	博文館	1942.10.5			未使用		
274	昭和十八年 婦人日記	樋口正徳(編)	朝日新聞社	1942.11.15			未使用		
275	戦友日記	住喜代志(編)	陸軍美術協會出版部	1942.12.1			未使用		
276-1	協和當用日記 康徳十年	高山馨(編)	満州国通信業務部、満州書籍配給株式会社	1942.10.10	○	男	佳木斯医科大学学生。	1943.1.1-12.31	「満州日記」としてビニール袋にまとめられた日記帳の1冊目。勉強に熱心であったことが窺える。人物は特定できないが、肖像写真が1枚挟み込まれる。
276-2	自由日記	山中泰三郎(編)	吐風書房	1942.11.15				1944.1.20-4.23	「満州日記」としてビニール袋にまとめられた日記帳の2冊目。巻末に筆者の妻による1953.6.18の日記あり。
276-3	自由日記	山中泰三郎(編)	吐風書房	1942.11.15				1944.4.24-7.12	「満州日記」としてビニール袋にまとめられた日記帳の3冊目。
277	協和當用日記 康徳十年	高山馨(編)	満州国通信業務部、満州書籍配給株式会社	1942.10.10		男	役所勤務。	1943.1.1-10.3	満州国で発行された日記帳。仕事の内容を中心に日々の出来事を詳細に記す。
278	學生日記	田中宋榮堂編集部(編)	田中宋榮堂	1942.10.30		男	中学校教師、大学にも在籍。京都在住。妻子あり。	1943.1.1-12.26	生活、仕事、および読書の記録。「寝ようと思ったがねむくないので読みかけの『青年』を讀んでしまった。近來これ程一気に讀んだ小説はない」(9.17)。
279	昭和十八年 グリコ日記	村上良正(編)	グリコ株式会社	1942.11.20	○	男	国民学校生徒。	1943.1.1-3.3	学校と家庭生活の記録。「永子さんがようふくをつくって下さいましたが小さくてきられませんでした」(3.1)。
280	ポケット當用日記	三省堂編輯所(編)	三省堂	1942.11.20		女	家賃収入を得る。東京在住。	1943.1.7-12.24	東京各所に赴き、映画、食事、買い物を楽しむ。女中を雇用。
281	皇紀二六〇三年 おみちの日記	天理時報社出版部(編)	天理時報社	1942.11.26			不明。	1943.1.11, 15のみ	箱根を訪れた記録。
282	昭和十八年 つはもの日記	住喜代志(編)	陸軍美術協會	1942.12.1		男	軍人。	1943.1.16-12.5	日々の軍事訓練がごく簡潔に記される。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
283	鍛錬日誌 昭和十八年度	辻村誠之(編)	東京私立高等女学校協會	1943.7.7	○	女	大妻技藝学校第4年。	1943.7.21-8.20	夏期休暇中の夏休みの記録。「モンペーとその上着とシミズを縫った」(8.2)等、ミシンを使う日が多い。
284	鍛錬日誌 昭和十八年度	辻村誠之(編)	東京私立高等女学校協會	1943.7.7	○	女	高等女学校生。	1943.7.28-8.28	夏期休暇中の実家生活での遊びや家事手伝いの記録。配給(8.1)、防空訓練(8.15)の記録。「お野菜の配給が多すぎたので乾そうおなすを作った」(8.1)。
285	軍隊日誌	記載なし		1943	○	男	学徒出陣兵、中部第42部隊。	1943.12.4-1944.3.5	「米英ハ必死ニ反抗シテキル。毎リ難イノハ量デアル。ダガ最後ノ勝利ハ日本ニアルト明カデア。大御心ニ店ヘ奉ルタメニ、宸襟ヲ安ジ奉ルタメニ、一億ハ私ヲナクシテ戦ハネバラナイ」(1943.12.8)。
286	聖戦完遂 皇軍日誌 附趣味の雑糞	下和佐平右衛門(編)	教学書房	1943.12.10	未使用				
287	當用日記 昭和十九年	博文館(編)	博文館	1943.12.15	未使用				表紙上部に「決戦體制版」とあり。
288	Note Book	備考・特記事項欄を参照のこと			○	女	小学生。福岡在住。五女。	1944.12.1-1945.4.25	メモ帳を日記帳代わりに用いる。戦時中の学校の様子、子どもの生活が詳細に描かれる。教師による日記の感想も随所にあり、ページ全体に大きい×印をつけて「何をしているか、こんな日記ではだめだ!」と叱責する日もある(3.7)。
289	昭和六年 新文藝日記	佐藤義亮(編)	新潮社	1930.11.17		男	医学生。	1945.5.7-12.23	1931年用の日記を1945年用に転用したもの。「沖縄島列島に於ける一小島の国民校生の最後を報導で聞く。彼等の死之は日本人の心であり又日本人全部の最後の姿なのだ。あの特攻隊勇士も彼等の如き者の中から生ずるのである」(5.12)。
290	農藝日記	富樫常治(編)	養賢堂	1946.1.30	未使用				
291	文藝自由日記 1947	秋山龍三(編)	青龍社	1946.11.30	未使用				
292	日記 昭和二十二年度				○	男	東都化学食糧研究所発明考案部。東京都杉並区在住。	1947.1.1-12.31	配給の記録が多い。
293	昭和九年 經濟日記	三浦弘一(編)	野村証券	1933.11.15		男	軍隊帰り。	1947.1.1-1.24	1947年の記録が書かれる(11参照)。付録に「主要經濟統計」「放資家参考資料」あり。
294	昭和二十三年度日誌	自家製和綴			○	男	森林組合員。新潟県中蒲原郡川東村在住。	1948.1.1-12.31	川東村森林組合の日々の活動記録。
295	日記 昭和二十三年	自家製和綴				男	東京在住。	1948.1.1-12.31	自家製の日記帳。飲食の記録しばしば。日夏耿之介『鷗外文学』の書評記事の貼付あり。
296	電気機関士 乗務日誌		東京鐵道局	1949	未使用				巻末に青年会主宰映画会の招待状の下書きあり。
297	栃木県民日記 昭和二十四年度	檜山重雄(編)	新日本教育教材会	1948.12.25	未使用				
298	新當用日記	信友社編輯部(編)	信友社	1948.11.1		男	農業従事。新婚、婿入り。	1949.1.9-12.30	「自分も家に来て早一ヶ月有余になるも婿殿はやはり情ないもの、幸ひに家人皆気持ち良さばかり自分等が一番呑気な方ではないだらうか」(1月末尾)。仕事柄、毎日の天候が子報通りか気にする。
299	おこづかい日記帳		友文堂書店	1949.11.1	未使用				
300	新令女日記 一九五〇年	武田春夫(編)	博文堂図書	1949.11.5	未使用				
301	當用日記 1950		塔文社	1949.11.20	未使用				

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
302	赤ちゃん日記	井上数平(編)	日本小児医事出版部	1949.12.20			未使用	増補第三版(初版1948.12.20)。子育ての記録。	
303	昭和二十五年度日記兼用模範家計簿		主婦と生活社	1950.1.1			未使用	『主婦と生活』新年号第二付録。	
304	夏休日記帳			1950.9.1			未使用	『東光少年』第2巻第9号付録。	
305	常用日記A	積善館(編)	積善館	1949.11.5	男	役場勤務。妻と小学生の娘あり。	1950.1.1-12.31	日々の生活の克明な記録。役場勤務をやめて民間に移りたいと洩らす(2.9)。娘が小学校に入学(4.5)。「今日は休日、日章旗を掲揚する。青空にへんぼんとして翻る。感慨あり」(4.29)。	
306	常用日記A	積善館(編)	積善館	1949.11.5	男	医師。	1950.1.1-12.31	患者の診療の記録が多い。起床時に卵黄を飲む習慣あり。ラジオで英語を学ぶ。	
307	少年少女日記 昭和25年 1950年	少年科学新聞社編集局(編)	少年科学新聞社	1950.1.1	女	小学生。	1950.1.3-1.7, 7.19-8.2	夏冬の休暇中の家庭生活が記される。父、母、祖母の話が多い。	
308	昭和二十五年ホームページ日記		奥付なし		男	大学生。	1950.2.8-10, 6.24, 10.5-10	証券会社の就職身体検査を受けたとの記載あり(2.10)。	
309	小学生日記 1950	雁書房編集部(編)	雁書房	1949.11.5		小学生。	1950.4.14-4.17, 7.28	「きょうは、おばあちゃんとおかしをかいにいきました。そしてあいすくりいむをかいにいきました」(7.28)。表紙に「卒業記念」の印あり。幼稚園の卒業時に贈られた日記帳か。	
310	自由日記 1950	鷹取隆資(編)	新協出版社	1949.10.10	男	会社員。31歳。	1950.5.25-1957.3.24	文芸や社会科学の読書の記録多数あり。大学卒業後、軍生活と捕虜経験を経て復員。戦争を振り返り、「戦争特に敗戦は人間の最も醜い面を現出する。死に弱りゆく人々の食料を盗むのが日本大衆の心であり、人間を屁とも思わず殺すが日本将校の心である。その醜さ一地獄園を私は捕虜のキャンプ二年の間にはつきり見て来たはづであった」(7.29)と記す。	
311	昭和二十五年度学級日誌 一年二組 男子部		自家製和綴		○	男	中学校1年生。	1950.12.11-1951.2.19	5名の男子生徒一年生による日替りの日記。一クラス55名(男子29名、女子26名)。日毎に「日課」「科目」「担任」「注意及び反省、希望」「一寸日記」の欄あり。「今日は先生がよっぽばらいにあった話をしてくれた。【あのね、先生が夜の九時ごろ茶又街道を歩いてたらよっぽばらいにあったそして先生のことをあまりからかうからあつぱーかつと入れた】」(1.25)。
312	昭和二十六年度 訟廷日誌	田原潔(編)	丸和出版	1950.10.1			未使用	裁判訴訟の記録用日誌。附録に訴訟便覧。	
313	昭和廿六年印刷日記	本間一郎(編)	印刷出版研究所	1950.12.15			未使用	巻末付録に「最新印刷百科便覧」あり。	
314	すずらん日記	鈴木松雄(編)	大日本雄弁会講談社	1951.1.1	○	女	気仙沼女子高等学校生、1934年12月15日生まれ。	1951.1.1-1.3	少女クラブ新年号付録。元旦、親戚にお年玉をせびって怒られる。二日、「戦後初めての家内そろっての肉なべ大会」。
315	初歩のラジオ 12月号 附録 初歩のラジオ・ポケット日記 1952	初歩のラジオ編集部(編)	誠文堂新光社	1951.12.1			未使用	付録に「ラジオの配線図表」や「国内放送電波表」あり。	
316	日記を兼ねた家計簿 昭和27年度	荒木三作(編)	講談社	1952.1.1			未使用	『婦人倶楽部』新年号付録。	
317	新農家日記	練尾一雄(編)	富民社	1953.11.1		男	教師。	1953.1.1-12.31	出勤の記録が中心。時折、「龍福寺」に出掛ける。
318-1	DIARY 1953 横線 当用日記	博文館新社(編)	博文館新社	1952.10.5	○	男	18歳(2.8)、教育大学に進学(4月-)。	1953.1.1-12.31	大学受験や大学生生活、桐朋学園での体操の練習について書かれる。

番号	日記帳名	著者・编者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
318-2	DIARY 1957 昭和32年 横線当用日記	博文館新社 (編)	博文館新社	1956.10.5			22歳、東京中央線沿線在住。高校の非常勤講師。	1957.1.1-1957.12.31	恋愛と体操、教員生活の日記。前半はしばしば人妻への思いがうつられる。体力測定の結果あり(724)。10月頃から他の女性への恋心が緩られる。
319	実用ポケット日記 1953年		積善館	1952.10.10		男	子供がいる。	1953.1.6-5.3	息子、娘が病気になる、入院する(3.2, 3.16)。
320	花の日記	中原啓一(編)	ひまわり社	1952.11.25	○	女	不明。	1953.8.21	日記帳の前半部は破り取られ、1日分のみ残る。「わたしは花が大すき。でも花びらが一まいづつちっていくのがつらい」(8.21)。
321	随想日記	越前良之助 (編)	信友社	記載なし		男	会社員。	1954?1.1-10.18, 1955.1.1-8.2	1954?年10月18日の日記の直後に大きく「日記を書くことをやめる」と宣言。1955年1月1日より再開。「金もなく、自分に適した職もなく、恋人もなし。アーあ、あくびのみ、昨日、××女史にあって人生のいざはなんだらうと云ったら笑っていた。奴には恋人がいるそうだとそれだけで意義のあるこった」(1955.2.13)。
322	昭和二十九年三年連用当用日記	博文館新社 (編)	博文館新社	1953.10.5			不明。	1954.1.2	「墓碑銘」と題された詩が書かれる(1.2)。
323	平凡スタア日記	岩堀喜之助 (編)	凡人社	1953.11.5		女	高校生。16歳、東京近辺在住か。	1954.5.1-1954.5.11	学校生活や家族の話題が中心。
324	ライオン當用日記	小林喜一		1942.11.5		男	社会人、東京在住。	1954.12.13-1955.8.26	写真に関する記述が多い。ほか、友人関係、映画鑑賞の記録。
325	平凡スポーツ日記	岩堀喜之助(編)	平凡出版	1954.11.5			未使用		
326	當用日記 昭和三十年	博文館新社 (編)	博文館新社	1954.10.5		男	会社員。	1955.1.1-12.31	「家庭は不愉快極りなし。女は一それもいい年になっても一直ぐに感情的になる」(1.9)。
327	さくぶんにつき1年生	作文日記研究会	育英日記	1956.4.5			未使用		
328	さくぶんにつき2年生	作文日記研究会	育英日記	1956.4.30			未使用		
329	その日その日 1956	武田春夫(編)	宝文館	1955.12.1			未使用		
330	カメラ日記 1956	育英版日記編集部・全日本カメラ教育者連盟(編)	育英日記				未使用		
331	山日記 1956年版	日本山岳会 (編)	茗溪堂	記載なし	○	男	日本山岳会員。1916年生まれ。	1955.12.28-1956.1.1	年末年始の簡潔な日記のほか、「徳高岳登山史ノート」と題して作成した参考文献リストあり。
332	家庭日記 昭和31年 1956	不明	不明	不明		男	保険会社勤務。江戸川近辺在住か。子供あり。	1956.1.1-12.31	日々の業務の内容を詳細に記す。奥付部分が破られ、書誌情報は不明。
333	當用日記 昭和三十二年		集文館	1956.10.5		女か	不明。	1957.1.1-2.27	日記帳としては用いず、『読売新聞』や『実業之日本』等の掲載記事が毎日筆写される。
334	随筆日記	育英版日記編集部(編)	育英	記載なし			未使用		付録に「文化人名録」「近代日本文学年表」。
335	平凡スタア日記	清水達夫(編)	平凡出版	1958.11.1		女	中学2-3年生、生徒会長。北海道在住。	1959.1.1-12.31	学校生活の記録が中心。文通好き。「函館へ行って買う品」等、日記に添えてイラストも多く描かれる。「今日は節分 珍しくそうじをすまし“平凡”を見た。今“ホシをあげる”を開いている。その後は勉強が余り短い文で日記帖さんに気の毒だが今日はこの位でおやすみなさい」(2.3)。
336	一九五九年 特撰自由日記		みどり商会	1958.9.10	○	男	麻布中学1年生。	1959.1.7-9.4	学校生活の記録。テニス好き。ほぼ毎日、日記欄の最終行まで書き記す。
337	山日記 1959年版	日本山岳会 (編)	茗溪堂	1959.1.1	○	男	学生。1941年生まれ。東京都豊島区在住。山と溪谷社ハイカー・クラブ所属。	1959.1.1-1.16, 2.9-16, 5.3-13	「岸内閣改造もめる。岸政権も今年一杯もつかどうかあやしい。早く倒れて社会党に変わらないかなあ」(1.11)。

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
338	山日記 1960 年版	日本山岳会(編)	茗溪堂	1960.1.1			未使用		
339	新日記 花籠 1961 年	宝文館編集部(編)	宝文館	1960.12.1			未使用		
340	昭和 36 年 山日記 1961 年版	日本山岳会(編)	茗溪堂	1961.1.1			未使用		
341	新学生日記 1961	越前良之助(編)	東京信友社	1961.1.1			未使用		
342	昭和 37 年 山日記 1962 年版	日本山岳会(編)	茗溪堂	1962.1.1			未使用		
343	62 アルパイン・ダイアリー／山の日記	安川茂雄(編)	梓書房	1961.12.10			未使用		
344	昭和 38 年 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1963.1.1			未使用		
345	昭和 39 年版 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1963.10.5			未使用		
346	昭和 39 年 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1964.1.1			未使用		
347	昭和 40 年版 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1964.10.5			未使用		
348	昭和 40 年 学生日記	赤尾好夫(編)	旺文社	1964.11.15			未使用		
349	全国観光案内地図付 常用日記 1965	金園社編集部(編)	金園社	1964.12.10			未使用		
350	山日記 1965 年版	日本山岳会(編)	茗溪堂	1965.1.1			未使用		
351	昭和四十年 旺文社 社会日記	鳥居正博	旺文社	1964.11.15		不明	1965.12.29-31	日記は書かれず、如来、菩薩、阿弥陀に関する基礎知識がメモされる。	
352	昭和 41 年版 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1965.10.5			未使用		
353	昭和 41 年度 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1966.1.1			未使用		
354	昭和 42 年度 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1966.10.5			未使用		
355	昭和 42 年版 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1967.1.1			未使用		
356	昭和 43 年版 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1967.10.5			未使用		
357	昭和 43 年度版 俳人日記	文芸出版社編集部(編)	文芸出版社	1967.12.5			未使用		
358	昭和 43 年版 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1968.1.1			未使用		
359	昭和 43 年版 熱帯魚日記	廣海貫一(編)	熱帯魚新聞社	1968.1.1			未使用	熱帯魚の飼育管理用の日記帳。	
360	昭和 43 年 学生日記 1968	旺文社(編)	旺文社	1967.11.15	○	女	高校 2-3 年生。	1968.1.1-12.23	学校生活の記録が中心。ピアノの練習に熱心。「スカレット。私はあなたのような情熱を持ちなにごとも体でぶつかっていく、そんな人になりたい。パトラー、私はあなたのような男臭く、ごういんに自分のペースにまきこんでくれるような人が欲しい」(2.25)。
361	昭和 44 年度 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1968.10.5			未使用		
362	昭和 44 年度版 俳人日記	文芸出版社編集部(編)	文芸出版社	1968.12.7			未使用		
363	昭和 44 年版 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1969.1.1			未使用		
364	昭和 45 年度版 文芸日記	博文館新社(編)	博文館新社	1969.10.5			未使用		
365	昭和 45 年度版 俳人日記	文芸出版社編集部(編)	文芸出版社	1969.10.14			未使用		
366	昭和 45 年度版 山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1970.1.1			未使用		

番号	日記帳名	著者・編者	版元	発行年月日	記入者情報			記入期間	備考・特記事項
					氏名	性別	属性		
367	昭和45年版三年連用当用日記	博文館新社(編)	博文館新社	1969.10.5			映画制作に携わるか。	1970.1.1-12.29, 1971.1.1-2.20, 1972.1.10-6.15	「横書き十枚のプロット力作。ウイスキー飲んでいい気分です。五時から部屋で酒盛りになる」(1970.1.16)。小説を中心とした読書の記録多数。競馬を好み、レース結果を記すこともしばしば。
368	昭和46年度俳人日記	文芸出版社編集部(編)	文芸出版社	1970.12.5			未使用		
369	昭和46年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1971.1.1			未使用		
370	昭和47年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1972.1.1			未使用		
371	昭和48年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1973.1.1			未使用		
372	昭和49年度俳人日記	文芸出版社編集部(編)	文芸出版社	1973.11.20			未使用		
373	きりえ日記	滝平二郎・加太こうじ	河出書房新社	1974.11.30			未使用		「餅」「白鳥」「まりつき」等を主題とする随筆と切り絵が中心で、日記欄は小さい。
374	昭和50年版山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1975.1.1			未使用		
375	昭和51年度山日記1976	日本山岳会(編)	茗溪堂	1976.1.1			未使用		
376	昭和53年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1978.1.1			未使用		
377	昭和54年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1978.1.1			未使用		
378	昭和56年版俳人日記	千葉祐夕	文芸出版社	1980.11.15			未使用		
379	昭和58年版俳人日記	千葉祐夕	文芸出版社	1982.11.23			未使用		
380	昭和58年度山日記	日本山岳会(編)	茗溪堂	1983.1.1			未使用		
381	昭和61年新短歌日記	青山ゆき路(編)	青空詩社	1985.12.15			未使用		
382	昭和62年新短歌日記	青山ゆき路(編)	青空詩社	1986.12.5			未使用		
383	昭和63年新短歌日記	青山ゆき路(編)	青空詩社	1987.12.1			未使用		
384	1988年山日記	日本山岳会(編)	日本山岳会	1988.1.1			未使用		
385	昭和64年新短歌日記	青山ゆき路(編)	青空詩社	1988.12.1			未使用		
386	漢詩日記	石川忠久	大修館書店	1989.11.1			未使用		
387	赤ちゃん絵本日記	坂元正一、巷野悟郎	主婦と生活社、ウェルカムベビーキャンペーン実行委員会	1994.5.2			未使用		
388	DIARY 俳句日誌 95	Raimundo Gadelha	Escrituras Editora	1994			未使用		ブラジルで発行された日記帳。
389	マイケルおじさんの農場絵日記	沢田真理	美術出版社	1995.12.20			未使用		
390	赤ちゃん日記	さくらももこ	小学館	1998.1.10			未使用		2刷(初刷1997.12.10)。
391	吟行日記		博文館新社				未使用		
392	書き込み式「いいこと日記」2004年版	中山庸子	マガジンハウス	2004.3.8			未使用		第二版(初版2003.10.16)。
393	書き込み式「いいこと日記」2005年版	中山庸子	マガジンハウス	2004.9.16			未使用		著者インタビューの新聞記事(朝日新聞、朝刊、2004年10月3日)が挿まれている。
394	農家日記2005年版	農山漁村文化協会(編)	農山漁村文化協会	2004.12.1			未使用		
395	Le Vésuve Diary 2005	有限会社 Le Vésuve	社団法人 ELEPHAS	2004.12.1			未使用		
396	吟行日記(叢)		博文館新社	不明			未使用		
397	児童新日記	高橋書店編集部(編)	高橋書店	不明	女	小学6年生。新潟県中蒲原郡村松町在住。	2.18-22, 3.10, 6.1-26		学校生活の記録。使用年度不明(巻末の家族の名前と年齢から推測すると昭和30年代か)。
398	自由日記		国光社	不明			未使用		
399	休暇日誌 第六学年	不明	不明	不明			未使用		学校(戦前の尋常小学校)が独自に制作した物か。
400	養蠶日誌	不明	不明	不明			未使用		奥付なし。昭和期の青年学校生用の日誌。
401	育児日誌		東京地方通信局	不明			未使用		昭和期発行。

註

- 1) 本稿のうち、「2. 日記帳目録の特徴」所収の「女性用の日記帳」の草稿を阿曾が、「趣味用の日記帳」の草稿を土屋が執筆し、その他を含めた全体を田中がまとめた。本稿の文責は従って全て田中にある。
- 2) 主著に『中世和歌史の研究』（角川書店、1972年）、『中世文学論考』（明治書院、1975年）、『中世和歌史の研究 続篇』（岩波出版サービスセンター、2007年）があるほか、『小島のすさみ全釈』（大久保甚一との共著、笠間書院、2000年）、『新日本古典文学大系 51 中世日記紀行集』（校注、岩波書店、1990年）、『新潮日本古典集成 20 とはずがたり』（校注、新潮社、1978年）、『日本紀行文学便覧 紀行文学から見た日本人の旅の足跡』（ヘルベルト・プルチョウとの共編著、武蔵野書院、1975年）等、多数。
- 3) 『日本文学逍遙』（新典社、2007年）、『海外の日本文学』（武蔵野書院、1994年）、『続・海外の日本文学』（同、2007年）、『文文学者の留学日記』（同、2008年）を参照されたい。なお、福田氏が生前に蒐集した日本文学の翻訳書コレクション（計3,037冊）が、「福田文庫」として国文学研究資料館に所蔵されている。寄贈の経緯とコレクションの内訳については、上掲『続・海外の日本文学』所収の「国文学研究資料館（国文研）の福田文庫について」（297-298頁）を参照のこと。
- 4) 福田家の蔵書とその整理作業については、田中祐介「福田秀一先生の思い出」（『文文学者の留学日記』所収）で簡単に記した。
- 5) 西川祐子『日記をつづるということ 国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館、2009年、46頁。
- 6) ドナルド・キーン『百代の过客 日記にみる日本人』講談社学術文庫、2011年、11頁。
- 7) 『中世日記紀行集』、507頁。
- 8) 日記資料コレクションに含まれる日記の書き手は、学者、学生、軍人、芸術家、芸能人、主婦、スポーツ選手、政治家、新聞記者、探偵、闘病者、農民、パチプロ、犯罪者など多岐に亘り、内容の硬軟も様々である。
- 9) OPAC 検索で現れる書誌情報の「コメント」欄に示される。
- 10) 図書館の所蔵方針により、寄贈資料のうち OPAC 登録の対象外となるものもある。
- 11) 阿曾歩・田中祐介・土屋宗一「近代日本の日記帳一人々の生の記録から何が分かるか」（第144回アジアフォーラム、2012年11月6日、14:00-15:00、於国際基督教大学本館251室）。
- 12) [] 内は目録の日記帳番号に対応する。
- 13) 近代日本における印刷・製本された日記帳出版の開始については、青木正美「本邦日記帳事始め」（『自己中心の文学 日記が語る明治・大正・昭和』所収、博文館新社、2008）、西川祐子「日記帳出版の前史」（『日記を綴るということ』所収、吉川弘文館、2009）を参照のこと。なお、本目録掲載の『明治廿八年用 吾家の歴史』は青木と西川の論考では触れられておらず、日記帳出版史の草創期に位置づけるため一考すべきと思われる。
- 14) 博文館の日記帳出版史については『稿本博文館五十年史』に詳しい。浅井康男「五〇年目に甦った『稿本博文館五十年史』（『出版ニュース』第1421号、1987年4月、8-10頁）に、稿本発見の経緯と既刊の『博文館五十年史』（博文館、1937年）との相違について詳細が記されている。
- 15) 『半圓當用日記』『袖珍當用日記』『横線當用日記』を含む。
- 16) もっとも、秘密は時として公然の秘密であった。西川祐子は前掲『日記をつづるということ』の中で、第三高等学校生であった野間宏の日記の随所に、級友間の盗読に関する言及があることを

- 指摘している（169-171 頁）。
- 17) 西川前掲書の特に「I 人はなぜ日記をつづるのか」「IX 未知の編成を生きる—教育装置か、その逸脱か—」を参照のこと。
 - 18) 須賀敦子『『サフランの歌』のころ』須賀敦子全集 第4巻』河出文庫、2007年、69頁。
 - 19) 1920年代以降の日本における余暇文化の発展については、竹村民郎『笑楽の系譜 都市と余暇文化』（同文館出版、1996年）を参照のこと。
 - 20) 松丸秀夫、五十嶋一晃、『『山日記』五十三巻の足跡』日本山岳会百年史編纂委員会編『日本山岳会百年史 [本編]』、茗溪堂、2007年、281-314頁。
 - 21) 六週間現役兵制度は1889年11月の徴兵令改正により成立。師範学校を卒業した小学校教員に課された短期の現役兵制度。1818年に一年現役兵制度に改正。
 - 22) ドナルド・キーン『百代の過客 日記にみる日本人』講談社学術文庫、2011年、25-26頁。
 - 23) 青木正美「古本屋控え帳(237) 各社日記帳の話—日記帳形態史(2)」『日本古書通信』第920号、2006年3月、22頁。
 - 24) 青木正美「古本屋控え帳(236) 『当用日記』の話—日記帳形態史(1)」(『日本古書通信』第919号、2006年2月、33頁)。
 - 25) ミシェル・ペロー（持田明子訳）『歴史の沈黙 語られなかった女たちの記録』藤原書店、2003、95頁。
 - 26) 西川『日記をつづるということ』296頁。
 - 27) 目録に収録した日記帳に関する問い合わせは、国際基督教大学アジア文化研究所(0422-33-3179, asian@icu.ac.jp)まで。



図1 『明治廿八年用 吾家の歴史』[6] の扉より

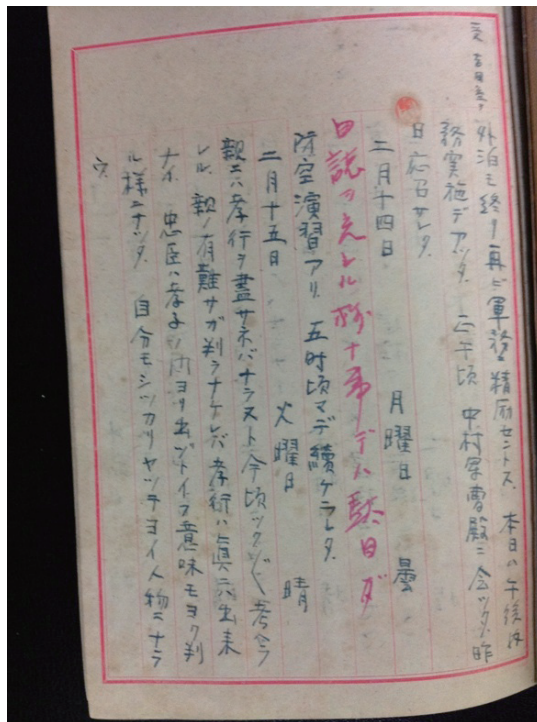


図2 『軍隊日記』[285] 1944年2月

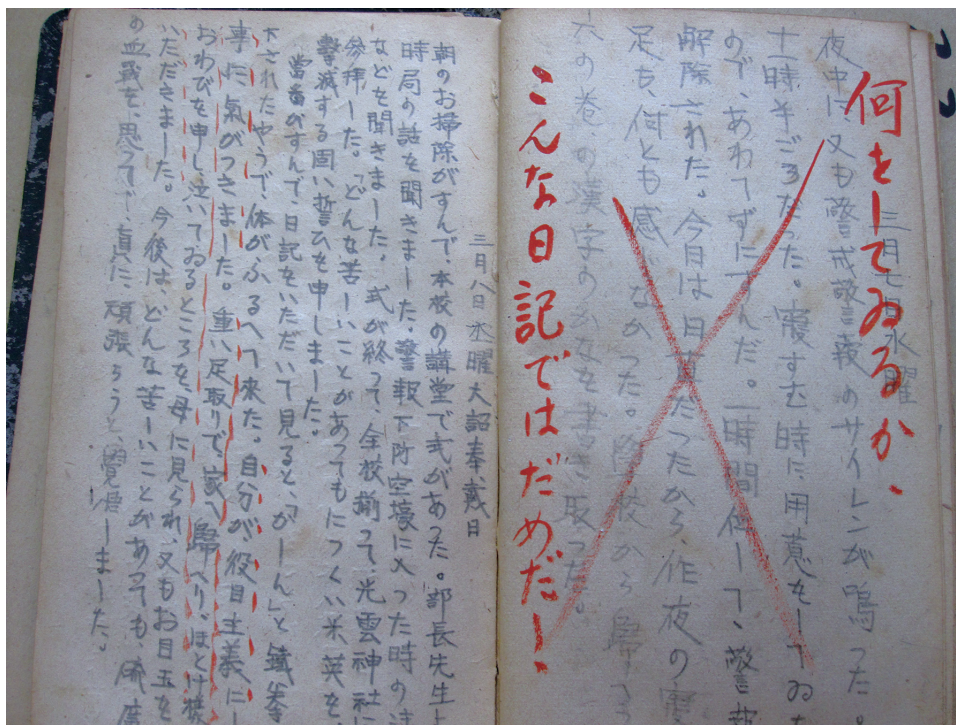


図3 『Note Book』 [288] 1945年3月7日